
世界中の想いより強く

ライカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界中の想いより強く

【Nコード】

N29710

【作者名】

ライカ

【あらすじ】

ウォールディア王国とケイオス帝国の十二年に及ぶ戦争は、王国の勝利で幕を閉じた。帝国は、第二皇女・レインを人質として差し出す旨を王国に伝えるが、レインは皇帝からある密命を受けていた。それは、ウォールディアの二人の王子、ジクルスとエルフォードの暗殺。しかし、ウォールディア王国で過ごすうちにレインの心は変化し……。

特殊な生い立ちを持つ皇女と、王位継承権を捨てた軍籍の

王子を中心に、心に傷を負った若者たちが出会い、それぞれの信念と共に成長する物語です。

プロローグ

男は焦っていた。ケイオス帝国の宣戦布告に応えたウォールディア王国が、国境の町に侵攻した知らせを受けたのだ。なんとしても、王国軍よりも先にその町に着かなくてはならない。さもないと、せっかくの儲け話がなくなってしまう。

ケイオスの帝都から三日三晩馬で駆けてきた。疲労は大きい。男も、馬もだ。闇夜の街道で男は馬を降り、水筒に口を付ける。が、水筒からは何も出てこない。一滴くらいはないのかと振ってみても、腰に差した剣が騒がしく鳴るだけだった。

男は舌打ちをして再び馬に跨った。嫌がる馬を力任せに蹴り、走らせる。

だが男と違い、跨る馬は若くなかった。間もなく立ち止まり、催促しても一歩も進まなくなった。仕方がないので男は、悪態をつきながら馬を置いて歩き出した。今度の儲け話が上手く行けば、血統の優れた馬が何頭でも手に入るのだ。

しかし、目的の町は既に、ウォールディア軍に攻め落とされた後だった。遠目に見ても、暗がりにも町の燃える明かりがはっきりと確認できた。諦めずに近付いてみても、ウォールディア兵のキャンプを見つけて足を止めることになった。

（畜生、俺は馬まで捨てて来たんだぞ！）

計画は完全に終わりだ、と思った。男の探す人物が、この戦火で生き残れるとは思えないのだ。

男がまた舌打ちをすると、遠くから女性の悲鳴が聞こえた。

「嫌っ！ 放して！」

見ると兵士に腕をつかまれた若い女が、近くの森から出されている。別の兵士も数人集まってきた。女は逃げようと抵抗するが、兵士に殴られて気を失った。おそらく、捕虜にされるのだろう。助け

る気は毛頭ないが、一応同情しておく。美人の捕虜がどんな扱いを受けるのか、想像するのは難しくない。

男は酷く残念だった。あと数時間早ければ、貴族の資産に匹敵する金が手に入ったかもしれない。

ウォールディア兵に見つかる危険性があるので地団駄を踏んで悔しがることそしなかったが、代わり兵士が出て行った森の中に入った。獣でも切って憂さ晴らしをしようと考えたのだ。

森の中心部まで来ると、男の優れた聴覚が小さな泣き声を捕らえた。あの町の生き残りだろうか、子供の声だ。そういえば、男が探すつもりだった人間も子供だ。あまり期待はできないが、探してみるのも悪くない。

獣の気配はしない。近くに大勢の人間　それも、訓練された軍人　がいるのだ、息を潜めるしかないのだろう。憂さ晴らしはできそうにない。歩くうちに泣き声は近くなってきた。

泣き声の主以外の人間がないことを確認して、男は慎重に子供の姿を探す。見つけた、大木の根元にできた空洞の中だ。

「出て来い、そのまま死ぬつもりか？」
泣き声が止まった。しかし当然ながら出て来はしない。警戒されているのだ。

引きずり出してやるうかと思っただが、やめておいた。悲鳴でも上げられたら面倒だ。

「俺はケイオス人だ。助けに来た」
嘘をつくのは得意だ。ケイオス人であるのは事実だが、助けることはないだろう。その辺の奴隷商人に売り払うだけだ。

子供は騙されて、木の下から這って出てきた。五歳くらいの少女だった。茶色の髪は短く切られ、あどけない顔を涙と泥で汚している。どこにでもいそうな子供だが、目の色だけは少し変わっている。

「銀の瞳……情報と同じだ」

男が思わず呟いたように、少女の瞳は銀色だった。そしてそれは、男が探していた人物の持つ特徴に当てはまる。

「おじさん、誰？」

予期せぬ幸運に、男は薄く笑った。利用して荒稼ぎするつもりでいた人間は、死んでいなかったのだ。そうと分かっていたら、奴隷商人などに売りはしない。

「ゼムだ。まだ二十代だから、おじさんはやめろ」

子供はこくと頷いた。

「ゼムでいい？」

「かまわん。お前の名は？」

よく見ると、この子供は先ほど兵士に連れて行かれた女によく似ている。親子かもしれない。だとしたら美人になるだろう。重要なのは顔立ちの美醜ではなく瞳の色なのだが、容姿が優れていれば何かと重宝する。まあ、十年以上先の話になるが。長い商売になりそうだ。

「あたしはレイン。……ねえゼム、あたしのお母さん、知らない？」

月明かり逆光で、レインにはゼムの表情が見えない。

「さあ……、知らないな」

目の前の男が自分の人生を狂わせて行くことになることを、少女は夢にも思っていない。

一話 ジクルスとエルフォード（前書き）

2001.2.19 ジクルト ジクルス に変更しました。ジクルトって誰やねん、と自己突っ込みしております。

一話 ジクルスとエルフォード

十二年続いた隣国ケイオス帝国との戦争がようやく終結を迎えたのは去年の暮れの話で、それからもう半年が過ぎている。長い戦争は両国の民を疲弊させたが、戦勝国ウォールディアの城下町は早くも活気を取り戻しつつあった。戦場に動員していた兵士たちも、ケイオスに駐留させた部隊を除いて帰還し、一時期乱れた治安も落ち着ついた。

そんな昼過ぎの穏やかな時間、ウォールディア城内の一室に一人の青年がいた。

先月二十歳になった第一王子・ジクルスだ。外見は王子に似つかわしくない。赤い髪は短く切られ、細身ではあるがよく鍛えられている。腰に帯びた剣も王侯の用いるデザイン性の高いものではなく、軍人さながらの無骨な物だ。現にジクルスは軍に籍を置いており、大抵の騎士よりも腕が立つ。

しかしウォールディア城は現在、戦後処理にあわただ忙しい。王位継承権を破棄した軍籍の王子も、政務に借り出されているのが現実だ。ジクルスは目の前に高々と積み上げられた書類から、金色のそっほう双眸をそと逸らした。が、現実逃避をしても減ることもない。結局、剣を握って硬くなった手に再びペンを持ち、黙々と書類を片付け始めた。

ケイオス帝国は、ウォールディア王国の倍の人口と三倍の国土を誇る大国だ。しかし、国土の大部分が乾燥した赤土で覆われており、水資源に乏しい。一方でウォールディアは、地下水や河川が豊かだ。十二年前に時のケイオス皇帝がウォールディアに宣戦布告をしたのも、ウォールディアの水資源を求めてのものだった。

国力では王国が圧倒的に勝っていたが、軍隊の規模は違った。当然ながら大国ケイオスの方が数で勝り、戦争を長引かせたのだ。

戦争をようやく終わらせたことで、ウォールディア宰相はそれまでの疲れが一気に出たらしい。終戦後半月で倒れ、現在も療養中だ。ジクルス自身は戦場で戦っていたのだが、生来の丈夫さが災いし、帰還後も仕事が回されることになった。

午前中は椅子に座ったジクルスの目の高さまでであった書類も、どうにか半分ほどになった。任されたのはあまり難しい判断の要らない案件なのだが、そんなことなら文官にやらせろよとジクルスは思う。時折混ざっている軍部絡みの報告書や陳述書だけが専門分野だ。城下町における治安の報告書に目を通したところで、窓の外から声がした。

「やっぱり兄貴は、宰相になるべきだと思う」

聞き慣れた少年の声に、ジクルスは視線を上げる。

「エル、ここは二階だ。目立つから入って来い」

「じゃ、お言葉に甘えて」

軽い身のこなしで窓枠を乗り越えた少年の名はエルフォード。ウォールディアの第二王子だ。ジクルスが王位継承権を破棄した瞬間から、時期国王とされている。

十五歳にしては幼く見える顔立ちは、エルフォードの五つ年下の妹・マリアとよく似ている。二人とも黒い髪に深緑の瞳で、第一王妃に似た容貌は名高い。

「なあ兄貴、少しサボって遊びに行かないか？ マリアが寂しがっている」

「お前が手伝えば、堂々と妹に会いに行けるんだがな」

ジクルスは第二王妃の子だが、腹違いの弟妹との確執はない。第一王妃ロベリアと第二王妃イベリアは姉妹で、仲も良かった。その上、イベリアは十六年前に病死した。当時四歳だったジクルスにとって、ロベリアは母同然の存在になっている。

「いいじゃないか。どうせ戦後処理やらが終わったら俺は王太子だ。」

嫌でも働かされる。それに、兄貴は自分で思っているよりも優秀な宰相になれると思うぜ」

エルフォードは、ジクルスの前ではかなり世俗的な口調で話す。度々連れ立って城下町で遊んだ結果だ。

「俺は剣しか能のない人間だ。宰相になったら国が傾くぞ」

「とか言いつつ、仕事の手を止めないあたりが優秀な証拠だろ……。とにかく、サボろうがサボるまいが、マリアはに会いに行つてやってくれよ。戦争に行つちまった兄貴のことを心配してたんだから」
そう言われれば、最後に異母妹の姿を見たのは数ヶ月前だ。

「善処する」

ジクルスの返事にエルフォードは納得こそしなかったが、これ以上話しても無駄だと判断したのか、扉から出て行った。部屋の外で警備をしていた兵士が、「エルフォード殿下、いつの間に!？」と驚くのが聞こえた。

独りになったジクルスは、せいかん精悍な顔を曇らせてため息をついた。

「マリアになら会いに行けるんだが……。同じ妹でも、随分違うものだ」

ジクルスには、もう一人の妹がいた。こちらは両親を同じくしている。しかしその存在は隠されていて、王宮で彼女の存在を知る者は、ジクルスとロベリアだけだ。国王すら知らない。

今年で十六歳になる、ジクルスと同じ赤い髪に金色の髪をもつ少女。顔は知らない。住んでいる場所どこか生きているのかすら、ジクルスには分からなかった。

「母上、ウォールディアは平和になりました。それでも、あの子の幸せは身寄りのない市井にあるのでしょうか」

* * *

エルフォードが去ってから数時間が経った。黙々と書類整理を続けていたジクルスは、首が痛くなって顔を上げる。すると、タイミングよく部屋の扉がノックされた。

「入れ」

肩を回しながら許可を出し、実際に誰かが入ってくる前に姿勢を正しておく。

客は文官だった。ジクルスと同じ位の年齢に見える。職業病的な観察結果も付け加えておくと、リーチはそれほど長くなく、筋力は乏しそうだ。

「失礼します。その……陛下が、議場でお待ちです」

「了解した。すぐ向かう」

また面倒なことになった、と内心で思うジクルスの苛立ちを察したのか、文官は落ち着きなく視線を彷徨さまよわせた。ジクルスは武官からの信頼は厚いのだが、文官との接触はほぼない。その癖に戦場での活躍の噂ばかりが一人歩きし、若干恐れられている始末だ。

おそらく若いからこんな役回りを押し付けられたのであろう文官青年に、ジクルスは少しだけ同情した。ので、退出を許す前に一言聞いておく。

「お前、エルフォードも呼ぶつもりか？」

「はっ」

見事な気をつけの体制で、上擦った声を出された。別に、軍式の返事を要求したつもりはないのだが。

「あいつは多分、城じゆう探しても見つからない。俺が呼んでおくから、お前は仕事を済ませたことにしておけ」

「はっ！……い？」

二話 ラピス

ウォールディア城下町の中央道から少し外れた場所に、一軒の民家がある。その中で今、一人の中年女性が昼食の支度をしていて、一人の少女が立っていた。

少女 ラピスは、決意を秘めた表情で養母の背を見据えた。

「今日を限りに、あたしはこの家を出て行きます」

言い切ってから、とうとう言ってしまったのだ、と思った。この家に引き取られてから六年間、ずっと胸に秘めてきた言葉を。

これで、ラピスは本当にこの家にはいられなくなる。それは長年の夢だったはずなのに不思議な寂しさもあって、ラピスの鳩尾の辺りを重くした。

養母の反応は素っ気無いものだった。ただ「そう」、と言っただけで、何事もなかったかのように。ラピスのことなどどうでもいいのか、内心の喜びを隠そうとしているのかは分からないが。

それ以上の会話はしようとせず、ラピスは荷物をまとめた小さな鞆を肩にかけると、薄暗い家を後にした。

真昼の城下町は明るかった。涼やかな風も吹いて、ラピスのツイテールにした赤い髪を揺らした。ラピスは家を出たところで立ち止まり、眩しさに目を細めながら伸びをする。そして、自分が自由になったことを自覚した。

鞆の中には家から持ってきた少しのお金と保存食も入っている。ショートパンツのベルトには、護身用に果物ナイフを付けておいた。今は夏なので、野宿をしたところで死にはしないだろう。これから働き口を見つけるのだ。自分では、酒場の給仕あたりになるかと考えている。

ラピスは美少女とまでは行かないが、そこそこ見栄えのする顔をしていた。外見の悩みといったら十六歳にしては細すぎる体つきく

らいたが、決して虚弱なわけではない。むしろ体は丈夫な方だ。そして、滅多に見ないくらい前向きな性格をしている。

目をつぶっても歩けるくらい慣れた道を東に行き、大通りに出た。さあ就職活動だ、と意気込んで周囲を見渡す。すると、ある一角に不自然に人が集まっているのが見えた。

「……これは、行くしかないよね」

財布を入れた鞆の紐をしつかりと結び、ラピスは人ごみに飛び込んだ。

「このガキ、馬鹿にするのも大概にしろ！」

割り込んだ人ごみの中では、体格のいい男が数人、一人の少年を取り囲んでいた。何があつたのかは知らないが、どの男も顔を真っ赤にして起こっている。騒ぎから一番近い青果店の主人は、乱闘に備えてさっさと店じまいを進めている。

しかし、渦中の少年は平然としたものだった。

「馬鹿にはしていないが、脅してはいる。さっさと盗んだものを返すか、もうすぐ来る軍人に捕まるかだ」

一触即発の空気は、大方の予想通り、男たちが破った。なにやらわけの分からない事を叫んで、少年に殴りかかる。真っ赤な顔は怒りだけのせいではなく、おそらく酔っているのだろうと想像させられた。少年は細身の外見からのイメージを裏切らず身軽で、ひよいと横に跳んでその拳をかわす。

少年に避けられたことで勢いの余った男が、青果店に最後に残っていたリンゴの山に突っ込んだ。店主が小さく悲鳴を上げると同時に、大量のリンゴが道に転がる。近くにいた人が拾い始めたが、多分そのリンゴが店頭に戻ることはないんだろうな、とラピスは思った。ラピスも近かったので、一つ拾った。気が付くと人ごみの最前列に押し出されていたが、まあいいかと見物をつけることにして。

盛り上がる観衆を気にせず、少年はリンゴのある場所　ラピスのいるあたり　から、別の男に向き直った。そちらも酒で頭が弱くなっているようで、考えなしに殴りかかり、回避される。その上少年は、ただでさえバランスを崩した男に、足払いをかけて転ばせた。

あと三人だ、とラピスが固唾を呑んで見守る中で、最初の一人がリンゴの中から立ち上がった。リンゴの入っていた木箱の、粉々になった破片から尖ったものを選び、少年に背後から襲いかかろうとしたのだ。

思わず、という言葉がふさわしいくらい何も考えず、ラピスは持っていたリンゴを落として叫んだ。

「危ない！」

そして、思考を再開しないまま、凶器を持った男に横から体当たりした。

ラピスは男もろとも地面に転がった。土の匂いがして、下手に転んで打ちつけた肘や膝に鈍い痛みが走る。立たなければ、と思う力が入らない。が、不意に誰かがラピスの腕をつかんで立ち上がらせた。

そのまま引つ張られて、ラピスは路地裏まで連れて行かれた。走っている間に見ると、ラピスの腕を引くのは、例の少年だった。時々振り返って、後ろの様子をうかがっている。ラピスは、よく見るとかつこいいな、と場違いな感想を抱いた。幼顔だが、緑の目は凛々しい。

路地を少し行ったところで少年は立ち止まり、手を離れた。ラピスは走って息が切れたのと、自分の行動が衝撃的なことで口が利けない。

少年はラピスに向き直って、人懐っこい笑みを浮かべた。
「助けてくれてありがとな。あのままだったら死んでたかも」

笑ったまま言うには物騒な台詞だが、その通りかもしれない。今更その事実思い当たって、ラピスの肌が粟あわた立った。あんなもので打たれていたら、普通の人間は……。

恐怖心の高まってしまった少女を励ますように、少年は続けた。

「今頃、俺の兄貴があいつらを捕まえてると思う。ほら、さつき言った『軍人』、化け物みたいに強いから、あいつらが束になっても敵わないんだ。」

それより、命の恩人の名前を覚えてよ」

「ラピ……ス……。ラピス、よ。貴方は？」

なんだか、地に足が着かないようなふわふわした心地だった。一番危なかったはずの少年は、平然としているのに。

「俺は、エル。……大丈夫？ 家まで送ろうか」

『家』と聞いて、ラピスは一気に現実引き戻された。自分は今さつき家出したばかりなのだ。帰る家などない。しかし、下手に言い逃れしても怪しまれるだけだろう。

「え、あ、もう大丈夫だよ。それより、お兄さんを見てきたほうがいいんじゃない？」

鋭いエルは釈然としない様子だったが、どう言えばいいのかわからないらしい。

誤魔化してしまった以上、このまま話を逸らすしかない。早く何か言わなければと考えていると、路地の入り口に救世主が現れた。

逆光でよく見えないが、背の高い人物だ。体格から想像するに、男。

「エル、無事か！？」

よく響く低い声が聞こえる。エルが「兄貴だ」と教えて、手を振りかえした。

あの男たちがどうなったのか気になったが、ラピスはそれよりもエルから逃げることを優先することにした。「じゃあ、あたしはこのへんで」と言って、エルの兄がいない方に歩き出すことにした。「待つて」

エルが慌てて呼び止めた。

「ラピス、仕事に困ったら王城に来なよ。俺と兄貴、城にコネがあるんだ」

「どうやら、家がないことはばれていたらしい。少し情けなくなっ
た。」

「ありがと、エル。お兄さんによろしく」

俯いたラピスは、早足でその場を後にした。エルがまだ何か言
いたそうだったが、気にしないことにした。

弟が珍しく呆然としている様子を、ジクルスは勝手に解釈した。

「エル、振られたか？」

「違う！」

町に出るなり出くわした荒くれの集団は部下に任せてきたが、ジ
クルスの目的は弟を連れ帰ることだ。身振りで歩くように促して、
聞いてみる。

「じゃあ、あの女の子はどうしたんだ」

エルフォードはしばし考え、端的に言った。

「命の恩人」

「は？」

「どんなシチュエーションだったのかは露骨に想像が付くが、この
弟は命の恩人に逃げられたのか。」

「……それが本当なら、国賓待遇で礼をしなくてはならないが」

「あー、一応、俺にはコネがあるから城に来るように、とは言っ
ておいた」

「コネの使い方は？」

「……教えてません」

意味ないだろ。賢いエルフォードにしては珍しい手落ちだ。ジク
ルスはため息をついたが、助け舟を出すことにした。

「こつちで探しておくから、外見の特徴を」

しよげた様子の弟は、それでもしつかりと説明した。

「割と可愛くて、歳は俺と同じくらい。髪と目の色が、兄貴のと同じだよ」

何か質問をされるかと思ったが、兄は突然立ち止まった。見ると、目を見開いて宙を見詰めている。

「兄貴？」

怪しく思ったエルフォードが呼ぶと、ジクルスは急に表情を引き締めた。

「その子の名前は？」

声も緊張している。ただ事ではないと悟ったエルフォードの表情も真剣になった。

「ラピス」

ジクルスは二、三度呼吸をしてから、硬い表情のまま告げた。

「ラピスと言うのか……。エル、ラピスは探さない。今後もできるだけ関わらないようにしろ」

「え、どういふことだよ」

「約束しろ、ラピスには関わるな。それと、王命で呼び寄せられた。すぐに城に戻るぞ」

納得のできるはずがないエルフォードに二の句を次がせず、ジクルスは帰城する足取りを速めた。

二話 ラピス（後書き）

あれ、ヒロインが出てこない……。
でも、多分もう少しなので、お付き合いのほどをお願いします。

三話 マリア

玉座の間の扉が開かれる前に、ジクルスはエルフォードを自分より前に立たせた。当たり前のように臣下の礼をとられたことに、エルフォードは一抹の寂しさを覚える。今も昔も優しい兄はしかし、戦場に行ってからどこか変わってしまった。

扉の両側に立っていた二人の兵士によって、重厚な造りの扉は開かれた。真正面にある玉座には、二人の父である国王アラン。隣の椅子には、王妃ロベリアが座っている。

王子たちが膝をついて挨拶すると、ロベリアは穏やかな口調で侍女に二人分の椅子を用意するように指示した。歳は四十過ぎだが、この母には凜とした美しさと威厳がある。天然気味な妹とは正反対だ。

エルフォードは顔を上げて、一段高い位置にある国王を仰ぎ見た。いつも思うのだが、父王と兄はよく似ている。勿論、年齢の違いは明確なのだが、真っ赤な髪や精悍な顔立ちは瓜二つで、二人が並ぶと、親子というよりは一人の壮年とその過去の姿を見比べているような気がするから不思議だ。もっとも、瞳の色が違うのだが。

赤い髪といえばもう一人……、とエルフォードが考えかけたところで、アランが口を開いた。

「お前たちを呼んだのは、此度の戦後処理について報告があるからだ」

母の表情がわずかに曇るのが、エルフォードには分かった。おそらく、ロベリアは先に知らされているのだろう。

アランの側近の男が、エルフォードに書簡を渡した。アランもロベリアも頷くので、それを広げてみた。

「ケイオス皇帝臣下の礼をとり、皇女レインをウォールディア王国に献上す」

美辞麗句の並んだ前置きをざっと飛ばし、要点を声に出して読み上げた。これで、斜め後ろのジクルスにも分かったはずだ。その先は速読しても、特に重要だとは思えない陳述のみだった。

エルフォードが顔を上げると、アランは苦い表情で告げた。

「献上、だ。この意味は分かるな？」

分かる。要するに、レインとかいう皇女は、この国の王族の妃お妃になるのだ。

ウォールディア王国では基本的に、妾めかけは認められていない。王妃は三人までと決まっているが、王太子妃は一人だったりと、結婚には厳しい国なのだ。

情の深いロベリアは、政治の道具にされる娘を思っおもて気を重くしているのだろう。

「ケイオスの姫を迎える事は、この国のためになるだろう。冬が来る前に王宮に移らせるつもりだ」

冬が来る前というと、あと一月ほどしかないじゃないか。随分ぞんざいな扱いをされる皇女様だな。

マリアはまだ知らないんだろうなあ、と思っていると、それまで沈黙を守っていたロベリアが口を開いた。

「陛下の第三王妃にするか、貴方がたどちらかの妃にするかは、まだ決めていません。とりあえずは後宮に置こうと考えていますので、そのつもりでいてください」

アランが席を立ち、玉座の脇わきに設おえられた扉しから出て行った。ロベリアもそれに続き、椅子を片付けた侍女たちもいなくなった。ぼんやりしていると、背後で兄も踵かかとを返す気配がしたので、慌あわてて呼び止めた。

「なあ兄貴、レインなんて皇女、聞いたことあるか？」

年頃の姫なら名前くらい知っていてもおかしくないのだが、エルフォードは聞き覚えがなかった。敵国の皇女なので、エルフォードの花嫁候補に入っていないなかったのは分かる。しかし、隣接する国にしては妙だ。

ところが意外にも、ジクルスは知っていた。

「ケイオス王都に程近い町に駐屯していたとき、噂で聞いた」

「へえ、どんな噂？」

「今上帝の庶子で、“レイン・ファイオ神の愛し子”だと」

どうせだからマリアに会いに行こう、ということでも、並んで歩き始めた。

「レイン・ファイオって？」

「ケイオスでは、銀の目の子供をそう呼ぶらしい。なにか秀でたものを持って生まれるから、“神の愛し子”だと」

階段を下りる二人の王子を見て、数人の侍女が歓声を上げた。

（兄貴は男前だからなあ）、と呆れ半分羨ましさ半分でエルフォードは嘆息をつく。そんな弟を見てジクルスは、（いや、お前が注目されてるんだって）と思うのだが。普段は聡明なエルフォードも、色恋沙汰に限っては酷く疎い。

「じゃあ、レインって子供なんだ」

「いや、十八か十九のはずだ。大抵の“レイン・ファイオ神の愛し子”は成長するにしたがつて目の色が変わるんだが、ごく稀に、成長期が過ぎても銀眼の者がいるらしい」

王子とはいえ、ジクルスは軍人に過ぎない。王位継承者で、より容姿の優れたエルフォードの方がよほど人気があるのだ。

玉座の間から一旦城の外まで出て、北側に設けられた別邸に向かう。後宮だ。現在はロベリアとマリアだけが住んでいる。

ちなみにエルフォードは東邸、ジクルスは兵舎で寝起きしている。城内にあるのは執務室だけだ。

＊ ＊

後宮の中庭に着くといきなり綺麗なソプラノの声が聞こえ、エルフォードは何か正面衝突……否、抱きつかれた。

「エル兄様っ、よく来てくださいました！」

黒く滑らかな髪に、華奢で小柄な体格。喜びに目を輝かせた顔はなんと愛らしい。少女の足元では、数匹の子犬がじゃれ付いている。

マリアだ。

飛びつかれたエルフォードは、予想外の攻撃に後ろ向きにひっくり返りそうになるのを、ぐっと耐える。ここで倒れては、兄の面目が立たない。隣でジクルスが笑っているのが若干憎たらしい。

「よく俺たちが来ると分かったな」

「うふふ、ネイが教えてくれたんです」

エルフォードから片手を離して、マリアは中庭の一角を指差した。その先には、大あくびをする一匹の黒犬。じゃれあう子犬たちの母犬だ。

どういう理屈なのか、マリアは動物と会話することができる。

可憐な妹はエルフォードから離れると、ジクルスを見上げて嬉しそうに微笑んだ。

「お元気そうでごりですわ、ジクルス兄様。マリアはずっと心配していたのですよ」

思わずジクルスの頬も緩んで、マリアの頭をよしよしと撫でた。「すまなかった。どこぞの放蕩王子のせいで、忙しくてな」

子犬の一匹が、キャンと吼えた。

マリアは放蕩王子の正体に気づかなかっただらしく、小首をかしげ

た。エルフォードと同様に童顔なので、十二歳という実年齢より、やや幼く見える。

エルフォードは気づいて、小声で「悪かったな」と悪態をついてみたが、ジクルスは涼しい顔で知らぬ振りを決め込んだ。エルフォードがほっつき歩いているせいでジクルスの仕事が増えているのは、紛れもない事実だ。

質素を好むロベリアの気質を反映して、中庭に置かれたテーブルもこれといった細工はされていない。上質な木材を生かした椅子に腰掛け、三人はしばし雑談に興じた。

冬が近いが、風を防いだ中庭は、日の光で暖かい。

「いいなあ、マリヤも城下町で遊びたい」

「そんなにいい事ばかりでもないんだぞ。今日だって泥棒の集団に絡まれた」

すねたように頬を膨らませたマリヤを、エルフォードがなだめる。荒くれに絡んだのはエルフォードの方なのだが、この際黙っておく。

「でも、勇敢な女の子に助けてもらったんでしょう？ 私、そのお方に会ってみたいなあ」

マリヤが夢見る少女になったすきに、エルフォードは横目でジクルスを責める視線を送る。見事に無視された。どうやら、ラピスについて教えるつもりはないらしい。

(兄貴、俺が黙って引き下がると思ったら大間違いだぞ)

半ば意地になったエルフォードは、自力で例の少女を探る決心をしたのだった。

四話 レイン（前書き）

度量衡はメートル法を使用しています。

四話 レイン

ケイオス帝国とウォールディア王国の国境付近の森を、一人の娘が歩いていった。

満月は真南の空から輝くが、森において十分な光源とは言い難い。それでも、娘は街道を行くよりいくらか速い速度を保っていた。男物の衣装をまとい長い髪は服の中に隠してしまっているので、一見ただけでは森歩きになれた狩人のようにみえる。

娘は東　ウォールディア側に向かっている。

ほっそりとした体格に似合わない無骨な剣が、娘の腰に音を立てることなく着けられている。月明かりにも鈍く輝く鞘は存在感があったが、娘の影にはそれ以上に目立つ特徴があった。

輝くのは三点、不似合いな長剣と、銀色の双眸。

成長期を過ぎてなおその特徴を持つ者は、ケイオスの長い歴史の中にも二人しかいない。一人は今や神話と化した建国帝の妃、もう一人がこの娘だ。二人の名は同じく、レインと言う。ケイオス古語で「慈恵」を意味している。

そう、真夜中の森を一人歩きするこの娘こそ、ケイオス第二皇女・レインだった。

息を切らすことなく黙々と歩くレインは、荷物らしい荷物も持っていない。冬も近いのに、額には汗さえうっすらと浮かんでいる。履いているブーツはたくさん細かい傷が付いた乗馬用のもので、森に入るまでは馬に乗っていたことを示していた。

（国境を越えてしまえば、追手も来なくなるはず。まさか王国に間諜は送れまい）

このままケイオスに残れば、皇帝の手駒にされることは避けられない。なんと少しでも逃げ切らなくては。

レインの足が自然と速くなった。飲まず食わずで丸一日歩き詰めだが、立ち止まるわけには行かない。

* *

千年の禍ちとせ払わざはひひて、英雄ラクシオ立つ。してケイオス、出来いできにけり。妃あり慈恵レインと言ふ。神の愛し子の乙女なりけり。

千年続いた災いを平定し、英雄ラクシオは皇帝に即位した。そうしてケイオス帝国は成立した。ラクシオ帝には妃があり、レインとレイン・フィオ言う。神の愛し子の乙女であった。

建造して間もない宮殿の一室は絢爛豪華な装飾が施されており、そこがラクシオの私室だった。未だに慣れない華美な服に身を包んだラクシオは、米神を片手で押さえながら嘆願書を読んでいた。
(民は勝手だ。祀り上げた英雄や王に、すべてを押し付ける)

こんなことならあの時レインを連れて行方をくramsすんだった、とラクシオが後悔していると、扉がノックされた。それだけでラクシオには、訪問者が分かる。

「入っていいぞ」

姿を現したのは、細身の女性だった。装飾金属になる本物の銀より美しい、銀色の瞳。類稀な美貌が滑らかな髪に縁取られている。ラクシオと同じく豪華な衣装は好まず、着ているのは白いワンピースだ。

女性はラクシオを見て微笑み、それから真顔に戻った。

銀の瞳の子供は時折見かけるが、成長が終わってからもそうである者は珍しい。古今東西探しても、このレイン一人だろう。

レインは、名もない辺境で育ったラクシオが剣を取り、近隣の邦々を平定するまで支え続けてくれた幼馴染だった。ラクシオが皇帝を名乗ると同時に、レインは皇妃になった。レイン以外の女性を妻とすることなど、ラクシオには考え付かない。

「ラクシオ、南岸の邑で、海賊被害が深刻なようよ」

「すぐに調査をさせよう」

「もう手を回したわ。オリカを行かせた」

「流石レインだ。オリカなら信頼が置ける」

オリカは誠実な男だ。かつてラクシオが命を助けたのを恩に思い、帝国成立までの三年間、互いの背中を守りあつて戦つてきた。重臣に取り立てようと思つたのは辞退されてしまったが、今もラクシオとレインに絶対の忠誠を尽くしてくれている。

「してレイン、西国との同盟は順調か？」

銀眼の神の愛し子はリイン・ファイオ大抵、一つ恵まれた特徴 “リイン・クル神才” を生ま

れ持つが、レインの神才が何なのかはよく分からない。レインは類稀な美貌の持ち主だが、学問に関する才能も抜きん出ているのだ。

「ええ、抜かりないわ。北の広大なる山脈は、後回しでいいわね」

「ああ。では俺は、東地方の邑をめぐり、配下に下るように求めに行く。留守を頼んだぞ」

「任せて頂戴」

妻は華奢な腕を腰に当て、無邪気な笑みを湛えた。

賢いレインは、他人の前では滅多に笑わない。一度見知らぬ男に不用意に微笑みかけ、危険な目に遭つたことがあつた。そのときは幸いにも、ラクシオが助けて事なきを得たが、気丈な幼馴染が声を上げて泣いた姿はラクシオの目蓋の裏に焼きついている。

だからラクシオとしては、妻を残して旅立つのはとても気がかりだつたりする。

「何度も言うようだが、市井には絶対に行くなよ。それから……」

「兵舎には近付かないし、厨房には長居しないし、部屋の外に出るときは動きやすい格好で武装。分かつてるわよ。ラクシオは心配性

ね

さすがに呆れたレインは、ため息をついた。

だがラクシオとしてはずっと、自分、百歩譲ってオリカを、レインの傍に置きたい。

ただ剣の腕が立つだけの青年が一国の主になり上がったのは、偏ひとえに愛しい妻のおかげだった。そして、無学な男が皇帝をやっているのも、レインがいるからなのだ。

*
*

二人目のレインは、森を早足に進みながら自嘲気味に笑った。

(何が神の愛し子だ。私の知る限り皆不幸じゃないか)

声に出せば無駄な体力を消耗するので、毒づくのは心の中でだけだ。

(皇帝の思い通りにはさせない。私は母とは違う)

レインの記憶に、母親に関するものはほとんどない。ただ、皇帝の妾ともなると一応記録には残るので、それを調べることはできた。母は強い人物ではなかった。そして、決して恵まれた人生ではなかった。

森の外れまであと二キロメートルほどの地点でのことだった。

人の気配を感じたレインは立ち止まり、剣の柄に手を添えた。周囲を見渡しても人影はないが、レインの聴力が下草の揺すられる音を捉える。複数だ。

追手か、盗賊か。

レインは一人がいるであろう場所に向かって声をかけた。

「私の正面と左に一人ずつ、右に二人、後ろに三人。困んだつもり

か？」

相手の敵意は明確なので、剣を抜いて構える。貴族の子女が護身用にするような細身のものではなく、戦場でも使われるような頑丈なものだ。それを、重みを感じないかのように片手で構える。

正面の一人が立ち上がった。みずばらしい身なりの男だ。下品な笑いを浮かべ、ショートソードを見せびらかしている。歳は三十くらいで、呼吸が荒い。

「盗賊か」

レインが確認する。男が頷く。命令された者でないとすれば、手加減をする必要はない。

男は酔いが回っているのか赤い顔で、それでも異常に光る目でレインを見た。

「こんな夜中に森を歩く若い女がどうなるか、分かっているだろう？」

「どうやら薄暗いおかげで、瞳の色は悟られていないようだ。」

「貴様こそ、追剥の末路を知らないわけではあるまい」

レインは力強く地面を蹴り、大上段から剣を振り下ろした。あまりのスピードに男は反応できず、口元に笑いを残したまま倒れた。肩から腹にかけて深い切り傷が刻まれ、大量の血を流している。

はみ出した臍腑にも眉一つ動かさず、レインは逆手に持ち替えた剣を男の心臓に振り下ろした。同時に残りの男たちが一斉に立ち上がり、弓を持っていた者が射掛けてきた。

しかし、十メートルもない近距離だったにもかかわらず、レインは飛来した矢を剣で叩き落した。そして男たちが驚愕するよりも早く、弓を使った一人の首を刎ねる。近距離とはいえ、十歩以上はある間合いを一瞬で詰めて。

血と脂で光る剣は片手で構えたまま、顔に付いた返り血を手の甲で拭って残りの盗賊を見た。

やや細められた目は、感情を一切映さない。

ひい、と悲鳴を上げた男たちは、脱兎のごとく逃げ出す。レインは追わず、首のない男のズボンで拭った剣を鞘に収めた。

一連の動きを終えてようやくレインの顔に表情が戻った。下唇をかみ締めて痛みに耐えるような顔をする。そして俯いて歯を食いしばり、搾り出すように言った。

「……結局私は、この道でしか生きられない」

数秒地面を凝視するが、視界の端に先ほど葬った男が映り、自嘲気味に笑った。

「今更だな。自分を嘆くには、多く殺しすぎた……」

月明かりが二つの死体と、その間で立ち尽くす血まみれの娘を照らしていた。

五話 紅龍部隊（前書き）

2011・2・13 ジクルスを「上司」と表記していたところを
「上官」と改めました。

五話 紅龍部隊

長く過労で倒れていた宰相が職務に復帰したので、ジクルスは久方ぶりの訓練に戻るようになった。

自分の部隊がいつも使っている一角に向かう。訓練に出られない間も素振りなどはしていたのだが、何せほぼ一年になる。腕は相当鈍っているだろう。

ジクルスは五十人の小隊を一つ任されていた。それ以上は力不足だと断った結果なのだが、ジクルスの微妙な身分から誰かの下に付くことは出来ず、師団にするにはあまりに小さい部隊の隊長という位置付けになっているのだ。この部隊に正式名称はないのだが、紅龍部隊リョウリウと通称が付けられている。少数ではあるが精鋭揃いの遊撃部隊になっていた。

荒地に建てられた兵舎の群れの外れに、やや開けた一角がある。正式な訓練場が設えられた場所とは兵舎を挟んで反対方向に位置しているが、ジクルスの部隊は大概そこで鍛錬する。整地された訓練場で実践的な力はつかないと、ジクルスに剣を教えた人物の助言に従った結果だ。

「あ、隊長！」

連兵場の隅で剣の素振りをしていた少年が、ジクルスに気付いて駆け寄ってきた。

「久しぶりだなセルム。怪我の調子はどうだ？」

もうじき冬になるというのに額に汗を浮かべる様子は、少年が真剣に訓練に取り組んできたことを示している。エルフォードもこれくらい真面目だったらなあ、歳は同じなのに随分違う。

セルムは淡くはにかんで答えた。

「もう痛みません。ただ、親指がないので盾は握れないんですが」
そう言って見せてきた左手には、薬指と小指しかない。終戦間際

の出陣で失ったのだ。

その痛々しい左手の甲には筋状の跡が付いていて、離れた地面に置いてきた練習用の剣の傍にはしわのついた帯状の布が落ちている。剣の柄に布で左手を縛りつけ、その上に右手を添えて使っていたようだ。

「それで両手剣だったのか。言ってくれば腕に固定する盾を出してきたのに」

「だって隊長、忙しそうだったので……」

確かに、城の執務室まで行って宰相代理に盾を所望するのは勇気が要りそうだ。忙しかったとはいえ、一年近く隊を放っておいたことに罪悪感が出る。

「それは済まなかったな。両手剣は誰かに教えてもらえたか？」

「はい。シアさんが、まずは素振りだって」

他の隊員もジクルスに気付き、続々と集まってきた。ざっと数えた限り、全員がいるように見える。

戦死者九人、負傷による退職十五人、年齢による退職六人。ジクルスがこの部隊を立ち上げたときのメンバーは、半分以上いなくなつた。残つた二十一人しかいない練兵場は、少し寂しい。

集まつたうちの一人が、腰に手を当てて言う。

「隊長が飼い殺しにされてるんじゃないかって、皆で心配してたんですよ」

二十一人中の紅一点、シアだ。恐ろしく気が強く、剣の腕も男顔負けに立つ。

シアの不敬罪にも問われかねない言葉は皮肉っぽいけど、穏やかな微笑みは優しい。ジクルスを心配してくれていたのは本当なのだろう。ジクルスは少し嬉しくなった。そして、自分を恐れている文官たちに囲まれる日々は負担だったのだ、と気付いた。

「近いな。書類に殺されそうだったよ。宰相の復職がもう一月遅かったら、どうなっていたか」

「ここで「え！」と叫ぶのは先ほどのセルム。
「せつかく生きて終戦迎えたのに、紙切れに殺されるんですか!？」
「いや、死なない。比喻表現だ」
愕然としたジクルスの訂正に、きよんとするセルム。集まった
隊員が一人の例外もなく爆笑しだした。隊の誰よりも幼いセルムも、
立派に隊の一員としての役割を果たしている。

さあ、訓練にもどれ。ジクルスの指示に、「えー」「面倒臭い」
とあちこちから反論が来る。こいつらは訓練を、と言うよりは隊長
を何だと思っているのだろうか。

「隊長の復活祝いに、模擬戦しましょうよ」
隊員の一人の声に、賛成の声が口々に上がる。どうやら部下たち
は、一年近く剣を振っていない上官を虐めたいらしい。それを指摘
してやると、模擬戦案を出した青年は堂々と開き直った。

「この機会を逃したら、紅龍の武神に一生勝てませんから」
「そうだそうだ！」とまたもや賛成多数。セルムは困り顔だが、
シアは剣の握り方を確認しだす始末だ。

「隊長、一番手は私でお願いします」
シアが怪しい微笑と共に申し込むと、提案した青年も黒い含み笑
いを浮かべた。

「ほら紅龍の君、姐御もこう言ってますよ」
このまま逃げてしまうことはどうやら無理そうなので、ジクルス
は渋々承知した。

「……その恥ずかしい呼び名をやめてくれるなら、やってやるう」

* * *

シアは首筋にピタリと当てられた剣に驚きながらも、自らの剣を

手放した。練習用に刃を潰した剣とはいえ、鉄の冷たさを鋭利に感じる。

「ま……参りました」

紅龍の通り名は伊達ではない、と内心に呟く。戦場を駆け巡る、紅の髪の竜。ブランクなど無かったかのような剣捌きだった。

隊員の誰もがシアと同じ衝撃を受けたようで、辺りは静まり返っていた。遠くから違う部隊の掛け声が響いている。数秒、その状態が続いた。

ジクルスは詰めていた息を吐き出し、剣を下ろした。

「腕を上げたな。だが、下段からの攻撃に弱い。それと、重心が後ろに傾きがちだ。回避した後攻撃に転じるのが遅すぎる」

「有難うございました」

この短時間 勝負は一分足らずでついたのだ で、完全に見切られていた。シアとて、経験が浅い訳ではないのに。

ジクルスがさっきまで自信がないような発言をしていたのは、本当なのだろう。シアの隊長は、自分の実力は正確に把握する男だ。とすると、万全の状態ではないにもかかわらずこうなったらしい。圧勝するとは思っていなかったが、完敗するとも思わなかっただけに衝撃は大きい。

「次は誰だ」

額の汗を無造作に拭うジクルスは隊員の群れを見渡して聞くが、出て行く者はいない。絶対に勝てない相手に戦いを挑む馬鹿はいない。

シアは木陰に座り込んで、高鳴った心臓を鎮めようと深呼吸した。タオルと水筒を渡してくれたセルムに礼を言う間も、現実感がなかった。自分は、なんて強い人の部下になったのだろうか。

ジクルスの相手を申し出る隊員はまだいない。シアだって、先に試合を見ていたら出て行かなかっただろう。

「では、カック」

「嫌です！」

この模擬戦を言い出した青年は、指名されるなり反射の速さで断った。

「おいカック」

ジクルスが非難の視線を向けても、カックは凄いスピードで首を左右に振っている。(いや、あんたはやられなきゃだめよ)とシアは思うし、隣で半眼になっているセルムも同じ事を思ったはずだ。呆れたジクルスはため息をつき、左手の盾を下ろした。

「なら、もう一人連れて来い。シア以外なら誰でもいい」

二対一にハードルを下げられて、ようやくカックは腹を括ったようだ。自棄を起こした目つきで参加者を募りだした。

紅龍部隊で一番の実力者は、言わずと知れた隊長だ。次ぐのは、終戦時まで副官を務めていた老練で、ジクルスの師だったのだが、退職した。シアはその次、つまり現時点では二番手のはずだ。それでもこのあしらわれ方なのだ、カックがあと一人と組んだところで勝てはしまい。

カックとてそんなことは分かっていたので、強い者ではなく、弱い者を指名した。ジクルスは満足げに頷く。指名されたセルムは緊張した面持ちで前に進んだのだが。

様子が余りにもおかしかったので、シアは声をかける。

「待ちなさいセルム。それは剣じゃなくてタオルよ」

「え!？」

それまでの緊張した空気が、一気に緩む。隊員から押し殺した笑いが聞こえ、ジクルスまで笑い出す。顔を紅潮させるセルムも、終いには笑い出した。

五話 紅龍部隊（後書き）

暗い過去を持つ登場人物が多いですが、楽しい話も書けたらなあ
と思っています。

この話には出てこないレイン（現代）は、無茶苦茶強い設定にな
っていますが、チートの類ではありません。そして、普段は中間管
理職っぽいジクルスも、実は剣に生きる人です。早く二人を会わせ
たいですが、まだしばらくは別々ですね（汗

六話 月下の裏通りで

身元がはっきりしないとはいえ、ラピスは若い娘だ。さほど怪しまれることもなく住み込みの働き口を見つけた。当てにしていた通り、酒場への就職だ。中年夫婦が営業していたが、婦人が臨月に入ったので給仕を雇うことにしたらしい。働きぶりによっては、婦人が落ち着いた後も雇い続けてもらえるそうだ。

そうと決まったら張り切って働こうと、ラピスは気合を入れて酒場の床を掃除していた。まだ昼間なので店は開いていない。酔っ払いに壊されないよう丈夫な造りになっている机や椅子を除けるのは骨が折れる仕事だが、体を動かしてかく汗は嫌いではない。

カウンターでは腹の大きな婦人が料理の仕込みをしている。酒場の物なので味付けは濃そうだが、是非賄いとして頂きたい。

小一時間もするとやる事がなくなったので、鶏肉をたれに漬けて入っている婦人に声をかける。

「ハンナさん、他にやることありますか？」

慣れた手つきで仕込んだ肉を入れた鍋に蓋をしたハンナは、驚いたようにラピスを見て、少し思案する顔になった。

「そうねえ……なら、手を洗って料理を手伝って頂戴。そろそろ旦那も戻ってくるころだから」

「はい」

改めて自分の手を眺めてみると、煤や埃で黒くなっている。服も似たような有様になっているので、着替えることに決めた。ハンナが到着かくれたので、今のところ衣服には困っていない。

小走りで店を飛び出したラピスのぴよこぴよこ揺れるツインテールを見送り、ハンナは愛娘を見るかのように微笑む。

「あの子は働き者ね……。この子も、あんな風になるかしら」

手を拭って優しく腹を撫で、ハンナは再び料理に取り掛かった。

夜になると、粗末な蝋燭の光で照らされた店内に、続々と客が集まりだした。職人、商人など様々だが、ほとんどが男に見える。ラピスは彼らの注文を取り、ハンナから酒や料理を受け取って走り回った。

カウンターから近い席はハンナが直接相手をするので、店の隅でカードを囲んでいる集団の所に向かう。

木製のやや重いトレイにビールを入れたジョッキを四つ載せ、熱気の立ち込める中を進む。初めこそ活き活きと働いていたラピスだが、閉め切った酒場には酒気が充満しており、気分が悪くなってきた。

（飲んでもいないのに酔っぱらった……。ビールとか料理とか持ったまま転んだらどうしよう）

これを配ったら少し休憩させてもらうか、と考えつつ、ビールをこぼさないよう慎重に机に置いていた。すると、その机の客の一人に声をかけられた。

「あれ、ラピス？」

聞き覚えのある少年の声だった。ラピスが驚いて声の主を探すと、すぐに黒髪と緑色の瞳が見つかった。

「エル!？」

「うん、エル。ラピスはここで働いてたんだ……て言うか、顔色悪いよ。大丈夫？」

ウォールディアでは飲酒に年齢制限を設けてはいないが、酒場の客の中ではエルが目立って幼い。それでも平然とカードを持つ姿は、板に付いていた。

しかしラピスは、そんなことに構っていられなくなった。エルの名を叫んだせいで体調は悪化してきており、頭痛やら目眩やらが大

変なことになってきたのだ。根が意地っ張りのラピスでも、大丈夫だとは言ってられない。それどころか、喋ることができない。視界はぼやけて、その上で平衡感覚が掴み辛い。

ラピスは返事の代わりに、机に手をつけてしゃがみこんだ。

「大丈夫じゃなさそうだね……」

苦々しく言ったエルは立ち上がりカード仲間に二、三言葉をかけると、ラピスの腕を掴んで立たせた。エルと会うのは二回目だが、二回ともこんな展開になっている。一度目と違ってラピスは酒気に酔っているのが情けないが。

ラピスが顔を上げてカウンターを窺うと、ハンナは頷いてくれた。そこまで見守つたらしいエルは、ラピスを支えて店の外に通じる扉へと歩き出した。

* * *

店は大通りからだいぶ離れた場所にある。夜間でも大通りは賑やかだが、その喧騒は遠い。

頻繁に開け閉めされる扉の傍では休み辛いだろつから、店の外壁沿いに裏通りに入った。ラピスを軒先に積まれた薪に腰かけさせ、エルはその近くで石を蹴っている。

「戻つてもいいよ」と言われたが、ラピスを残して戻つたらハンナに怒られるので断る。エルはこの酒場に随分世話になっており、ハンナともその夫とも顔見知りだ。

ラピスは困つたように俯いたが、すぐに眉間にしわを寄せてなにやら考えだした。おそらく、エルを店に戻すための作戦でも練っているのだろつ。その間エルは、赤毛の少女を観察することにした。

背丈はエルよりも少し高い。痩身だが不健康な痩せ方ではない。赤い髪は、兄と色の濃さまで同じ。ついでに言えば、エルの父とも

同じだ。瞳の色も兄と同じで、ジクルスの目色は母譲りなので、亡き第二王妃イベリアとも同じだということになる。顔は可愛いが、ジクルスと微妙に似ている。

他人の空似にしては、出来すぎている。

(まさかラピスは……)

エルの脳裏に、一つの仮説が浮かぶ。そうであれば、ジクルスが頑なに会うことを禁じるのも、説明がつくかもしれない。

エルとラピスの思考は、唐突に打ち切られた。

一人の女性が、凄まじいスピードで二人の前を通り過ぎたのだ。

女性は決してエルのすぐ傍を通ったわけではないのだが、エルの前髪が風にふわりと舞い上がった。裏通りとはいえ、大人が二人両手を広げられる程度の幅はある。

「速い……」

「速……」

ラピスはエルと、同時に同じ感想をこぼした。互いの声が混ざって響くのが可笑しかったのか、ラピスはエルの方を見て破顔した。

女性の後姿は既に消えていた。

和やかさを装って笑い返しつつ、エルはその女が帯剣していたことにも気付いていた。不用意に怯えさせないためにラピスには黙っておいたが、無言で店の中に戻るように促す。

その判断自体は正しかったのだが、如何せん遅かった。

女を追うように、商人風の中年男が一人走ってくるのが見える。こちらは人並みの速度だが、やはり帯剣している。

男はラピスとエルの十メートルほど手前で走るのをやめ、肩で息をしながら歩み寄ってきた。確実にこちらを見ている。

嫌な予感が働き、エルはラピスを背に庇う。ラピスが息を呑むのが聞こえた。

正直に言えば、男に対抗する術すべはない。ラピスは運動能力に優れているようだ、今はふらふらだ。一方でエルは喧嘩にこそ滅法強いが、それは相手が非武装のときの話だ。

(ラピスだけでも逃がせないだろうか)

上手く立ち回れば少女が店に駆け込む時間くらいは稼げるかもしれないが、小さな店には雇が一つしかない。男がラピスを追えば終わりだ。

考える間に、男が抜剣する。その剣先はエルの顔に向かっていった。

エルは意識して無表情を保った。ここで死ぬわけにはいかない。

「何の用だ」

白状すると結構怖いのだが、声に怯えは出さない。

剣の男は、嘲あざわらるように笑った。

「冷静だな。だが……」

台詞を切ると同時に、剣先をラピスに向けた。ラピスが小さく悲鳴を上げた。

「これでどうだ？」

「……その子に手を出すな」

「耳を貸すとしても？ 人質にするなら、弱い方だ」

男は少女の襟首を掴み、強引に立たせた。

先ほど女性が走り去った後を、男は歩いて進んだ。その自信に満ちた歩はラピスとエルにとっては不吉でしかなかったが、エルは気付かれない十分な距離を保って尾行し続けた。

住宅地の広間にまで出たところで、男は立ち止まった。エルは路地の家屋の陰に隠れて見張っている。

剣をラピスの首元に当てた男が、一点を向いて話します。

「出て来い。そこに居るんだらう」

問いではなく、確認。それを裏付けるように、建物の隙間から先

ほどの女性が姿を現した。

月明かりに照らされた女性は、体格から察するに、エルやラピスよりも二、三歳年上。滑らかな髪が膝の辺りまで伸びている。容貌はよく見えないが、その手には抜き身の長剣が握られていた。瘦躯に似合わない重厚な剣を、軽々と持っている。

男は人を見下したような笑みを絶やさない。

「剣は置け。見知らぬ子供とはいえ、見捨てられるお前ではないだろう」

女性は齒を食いしぼり、剣を捨てた。一瞬だけラピスに向けた視線は、謝罪しているようにも見えた。

ラピスの表情は角度的に見えない。

「俺から逃げられると思ったのか？ 次こんなことがあれば、トアンの命はない」

「なっ……！？ ゼム、トアンは貴様の妹だぞ！？」

「だから何だ？ それと念のためにいっておくが、俺が殺されたらトアンを殺すように指示してある。確かにお前は強い。俺程度から逃げるのは、造作もないだろう。だが、お前は情に厚すぎる」

数秒硬直した女性が、ぎこちなく頷いたのを確認し、男はラピスの腕を強く引つ張った。ラピスはバランスを崩しかけたが、体の向きを変えて立ち直した。ようやくこちらを向いたラピスは、目を閉じていた。男にそうするよう指示されていたのだろう。

次に口を開いたのは、意外にも女性だった。

「そのまま真っ直ぐに歩いて。絶対に振り返っちゃ駄目よ」

優しい声音だった。例えるなら、幼い妹に言い聞かせるような調子だ。先ほどまでは男のような話し方をしていたのに、この台詞は女らしい。

ラピスは腕を解放されると同時に歩き出した。目を閉じている割には真っ直ぐに、エルの隠れる方に向かっていく。微かに震えているように見えるのは、エルの気のせいではないだろう。

放した人質に一瞥をくれた男は剣を鞘に収め、女性に「行くぞ」と言つてラピスとは反対方向に歩き出した。女性はその後に続いた。男は振り返らなかつたが、女性は一度だけラピスを確認した。その時一瞬だけ、エルと目が合ったような気がした。

「ラピス、怪我は!？」

命の恩人を危険な目に遭わせてしまい、エルの良心はかなり痛んでいる。

「……ない、と思う」

見ていたエルでさえ恐怖に足がすくみかけたのだ。実際に剣を当てられたラピスが平気だったはずはない。それでも、ラピスは泣かなかつた。一見どこにでも居そうなこの少女は、実は暗い過去を持っているのかもしれない。

「ごめんな。何もできなかった」

「そんなことないよ。迎えに来てくれたでしょう? さ、店に戻る」

逆に励まされる自分が情けなくて仕方なかつた。だが、そろそろ戻らないと大変なことになりそうだ。

「ハンナに怒られる……」

「え? ハンナさんが怒ることなんてあるの?」

「あるさ……思い出したくもない」

去つた狂人より、これから会う鬼のほうが怖い。酒場の女主人が本気で怒つたときの剣幕を知っているエルは、一秒でも早く新人ウエイトレスを送り届けなければと思つた。

七話 皇女の到着（前書き）

2011.3.11 「妃殿下」を「ロベリア陛下」に訂正。王妃
を「殿下」と呼ぶのはおかしいですね（汗）

七話 皇女の到着

ケイオスの姫君が到着する日を、マリアは心待ちにしていた。

内向的な性格と身分の高さが災いし、マリアには友達といえる人物が少ない。犬や猫は多いのだが、やはり人恋しくなることもあるのだ。ケイオス皇女はどうやら後宮に住まうらしいので、毎日会えるかもしれない。

普段はかまってくれる兄たちにも、数週間前から会えていない。その数週間前に、ジクルスとエルフォードが言い争いをしていたのが目撃されているので、マリアは心配でならなかった。皇女の出迎えにはきつと、マリアも含めた家族全員が集まることになるだろうから、原因を訊けるかもしれない。

期待に胸が膨らんだマリアは、廊下をいつもより少し速く歩いてきた。ところが、角の先から話し声が聞こえたので立ち止まる。

「いい加減教えてくれよ。あの子は誰なんだ？」

同腹の兄・エルフォードの声だ。平淡なように聞こえなくもないが、マリアには分かる、確実に苛立っている声だ。普段であれば兄を見つけたら抱きつきに行くのだが、流石に気まずい。マリアは人からは天然だと言われるが、空気は人より敏感に読めるのだ。

「教えられない。ロベリア陛下のご指示だ」

同じように淡々と答えたのは異母兄・ジクルス。その冷たい声は、マリアの知っている優しい兄とはかけ離れていた。マリアとエルフォードの母で、自らの伯母である女性を、他人行儀に「ロベリア陛下」と呼ぶのが寂しい。実の父親のことも「陛下」と敬称で呼んでいる。家族なのに、とマリアは思うし、エルフォードもおそらく同じように思っているだろう。

（そのうち、私やエル兄様のことも敬称で呼ぶようになってしまうのでしょうか）

悲しくなったマリアがしゅんと頂垂れる間に、姿の見えぬ二人の会話は進んでゆく。

「母上の？ まさか本当に父上の隠し子なんじゃないだろな」

エルフォードの言葉も刺々しかった。マリアにとっては何の話なのかまったく理解できないが、穏やかではない。

「口を慎め。誰が聞いているか……不味いな」

「何がさ」

「角の向こうに人がいる」

マリアは息を呑んでしまい、慌てて口を押さえた。遅すぎたが。

ジクルスが人の気配に敏感なことを、すっかり失念していたのだ。

これは、さっさと謝ってしまおうしかない。

「あの……マリアです。立ち聞きしてしまい、申し訳ございませんでした」

エルフォードは基本的にマリアに甘いが、ジクルスは怒るときは怒る。それがとんでもなく怖い。マリアは、夜の城内で幽霊に出くわすよりも、上の兄に叱られるほうが怖かったりする。

「兄貴、マリアを責めるなよ」

「ああ、分かっている。こんなところで言い争いをした俺たちに非がある」

どうやら、叱られることはなくなったらしい。マリアはほっと息をついた。ほのかに笑ったエルフォードが、髪が乱れない程度に頭を撫でてくれた。それだけで、嬉しい。

けれど、兄たちがマリアを騙そうとしているような気がしてならなかった。先ほどまで言い争いをしていたのに、妹の目前では揃って良い兄だ。

（理由を聞けそうな雰囲気ではありませんね）

マリアは少ししよんぼりした。

皇女の割には少ない荷物と共に、レインはウォールディアへ来た。侍女や護衛はウォールディア王が許さなかったので、ウォールディア人の従者を連れての到着だ。遠目に見る限りでは儂げな印象を受けるが、よくよく見ると足取りは頼もしい。背筋を伸ばしてしっかりと前を向くその様子は、長旅の疲れなど微塵も感じさせなかった。大広間の上座に設えられた壇にアラン王とロベリア妃が並び、アランの隣にエルフォードが、ロベリアの隣にはマリアが立っている。レインはエルフォードよりも背が高いので、エスコート役はジクルスになる。パーティーは適当に抜け出して鍛錬をするつもりだったジクルスにとってはまったくありがたい話だが、弟を笑い者にするわけにはいかなかったので引き受けた。

かくしてジクルスは広間の入り口で皇女の手をとったのだが、そこで職業病が出て、思わず小声で尋ねてしまった。

「皇女様は、剣をお使いに？」

触れた掌が、女性にしては硬かったのだ。特に硬い部位が、ジクルスと 剣を握る者と同じ位置であることもその予想を裏付けていた。

皇女は驚いたようにジクルスの顔を見上げたが、自分の手をとったジクルスの手を見て納得したようだった。聞いた通りの銀色の目が、妙に印象的だ。

「ええ。女だてらにと咎められますが、剣と乗馬は嗜んでおります。殿下はなんでも、剣術に明るいそうですね」

ジクルスの勘に過ぎないが、この皇女はどこか猫を被っているというか、大人しい振りをしているような感じがする。この手の硬さ

は、嗜む程度の剣術や馬術では説明がつかない。

「いえ、噂ほどの腕ではありません。軍籍なのは、剣しか取り柄がない者ですから」

まあ追々分かるだろうと、皇女に合わせてジクルスも、対外用の上品な言葉遣いと人当たりのよい笑顔で応えておくことにした。隊の部下に「別人じゃないか！」叫ばれたこともある貴公子面だ。

「ご謙遜を。殿下は武勇も然ることながら、優れた統率も名高くないらっしゃいますわ」

微笑む皇女は美人だったが、どこことなく影があるように見えた。

まあ、人質に出された姫が元気そうだったら、そちらの方がおかしい。

あまり話し込んででも要らぬ噂の種になるだけなので、皇女を促して王族の所まで行く。毅然とした歩みだ。立場の弱い敗戦国の姫ながら、皇族の威厳を感じる。

ケイオス風の、膝を折って右手を左肩に当てる礼をしたレインに、アランは壇上から声をかけた。

「長旅ご苦労であった、レイン姫よ」

目を伏せたままレインは、大人しい言葉を返す。

「陛下のお心遣いの賜物で、快適な旅で御座いました」

「慣れぬ異国の地では何かと不便も多かるう。そこにいる息子は無論、妻や娘に頼ると良いだろう」

深く考えずに聞くと優しい台詞だ。まるで親戚か同盟国の姫にでもかけているかのような。しかし、ジクルスは気付き、壇上のエルフォードも気付いた。

『そこにいる息子は無論……』 エルフォードは範囲外だ。

「身に余るお気遣い、感謝致します」

皇女は物静かな様子を保っている。この人も気付いたかもしれない、とジクルスは思った。

ジクルスが王位継承権を破棄した現在、王太子こそ決まってい
ないが、その候補として最も有力なのはエルフォードだ。次ぐのはマ
リアだろう。その後、王弟などの貴族が入る。

つまりレインは、皇女の体面は保ったまま、権力から遠ざけられ
るのだ。

壇を仰ぎ見ると、伯母と目が合った。無言で「覚悟を決めなさい」
と言われたような気がした。

覚悟など、既に決まっている。王位継承権の破棄を決めたあの時
いや、もっと前、己の運命を受け入れた、幼き日に。

ジクルスの脳裏に、古参の侍女に連れていかれる赤毛の赤ん坊が
浮かんだ。

八話 英雄譚

レインがウォールディアに到着してから数日経ち、ようやくレインの身辺も落ち着いてきた。

「レイン様の瞳って、とても綺麗ですね」

テール越しにくっと近づいてくる深緑の瞳は、ウォールディア王女・マリアのものだ。黒い髪がふわりと揺れて、愛らしい。

朝食を共にしようと、マリアがレインの部屋を訪れてきたのは、数十分前の話になる。食事は終わらせて、今はお茶を飲んでいるのだが、どうやらこの王女は喋るのが好きらしく、城の噂話や兄たちのことなどをずっと喋り続けていた。

レイン自身は、この銀の瞳が嫌いだ。

「マリア様の翡翠の方が素敵では？」

自分の目に関する感想はさておき、レインは本心からそう思っている。エルフォード王子とロベリア妃もそうだが、吸い込まれそうな緑は印象的だ。

マリアは照れたようにはに cand、先ほどから足元にいる犬の頭を撫でた。その犬はネイという名前だと、食事前に教えてもらった。「ありがとうございます。でもやっぱり、翡翠は月に勝てませんわ……そういえば、ケイオスの建国帝妃様も同じ色の瞳だったそうですわね。えっと、“神の愛し子”^{レイン・ファイオ}でしたっけ？」

少し驚いた。マリアはケイオスの伝承について知っているらしい。「はい、正確に言いますと、銀眼の子供のことを“神の愛し子”^{レイン・ファイオ}と呼びます。彼らの瞳は成長期に色が変わってしまいます。しかし、

建国帝妃と私だけは何故か、この目のままだったのです」

「不思議ですね……。そういえば、その建国帝妃様の名前も“レイン”でしたね」

「よくご存知ですね。私の名はそれに倣ったと聞いています。……もつとも、ケイオスの女を百人集めれば、二人は“レイン”ですが、意味は、ケイオス古語で“慈恵”あるいは“雨”です」

「“慈恵”と“雨”が同じなのですか？」

くるくるとよく変わる表情が、マリアを幼く見せている。とはいえ知的好奇心の強さを窺わせる言葉に、レインは好感を抱いた。

「ええ。ケイオスは砂漠の国ですので、年に一度の雨は、神からの慈恵に他ならないのです。それにしても、ケイオスについてよくご存知ですね」

するとマリアは、また照れたらしく、ネイを膝に抱き上げた。

「実は、レイン様がいらつしやると聞いて、ケイオス歴史書の写しを取り寄せたのです。夢中になって読みましたわ」

夢中になったということは、マリアが読んだのは、民衆向けに書かれた建国帝の英雄譚だろう。レインも何度か読んだ。

「『ラクシオ伝記』ですね。私もよく読みました」

微笑を浮かべて言い、上品な香りのする茶を口に含んだ。ウォールディアの茶は種類が豊富で、香りもよい。作法はケイオスが出る前に習った、ウォールディア流のものにしている。傍目に見る分には完璧なはずだ。

目を輝かせたマリアは「まあ！」と驚きの声を出し、再びテーブル越しに身を乗り出した。

「読んでおいて正解でしたわ！ レイン様、私はラクシオ帝様がレイン妃様に求婚する場面を、本が皺になるまで読み返しました！」

頬に赤みが差す様子がなんと愛らしい。

その書物には書かれなかった部分まで知っているレインとしては、

同じように頬を染める気にはなれないが、王女がレインと親交を深めようとしているのは分かるので、黙っておく。

マリアが話す場面は『ラクシオ伝記』の中でも名場面と名高く、多くの絵師が絵にしており、歌劇に必ずといっていいほど取り上げられてきた。内容は、ケイオス人なら誰でも覚えている。

実際にそんなやり取りがあったのかはさておき、英雄譚であるにもかかわらず娘心も掴むのは、このシーンがあるからだ。

「『私は一人の男として、レインと共に在りたい』」
ラクシオ帝が言ったと伝わる台詞を、レインは呟いた。同じなのは名と目の色だけで、それ以外は全く己と重ならない建国帝妃の想いを、レインは理解できない。しかし、これは名台詞だと思う。

続きはマリアが引き取った。

「『レイン、私と結婚して欲しい』。うふふ、こんな風に言われたら、それは幸せでしょうね」

* * *

館^{たち}は湖^{ひむかし}が東^{むかし}なり。ラクシオ、レインが肩^{いだ}を抱^{いだ}き告^いぐ。

建国を決意したラクシオは、オアシスに臨む館の窓辺で、レインの肩を抱いて告げる。

「レイン、私は帝国を築きたい。忌まわしき“影”どもが引き裂いてしまった人と人との信頼を、取り戻せる国を、創りたい」

長く続いた戦いが、二人を少年少女から大人に変えていた。残る幼さはレインの銀色の瞳のみだが、それすらもレインの美貌を引き立てていた。

レインはそつとラクシオにもたれかかり、そのたおやかな手を恋人の手に重ねた。

「十年前“影”が変えてしまったものは、あまりに大きいわ。ラクシオ、貴方は剣を置いても闘い続けるというの？」

その声が帯びるのは、愁いと諦め。返事など、分かりきっていた。ラクシオは深く頷いた。

「誰かがやらなくてはならない事だ。しかし、誰にでも出来ることではない」

それまでは二人揃ってオアシスに映る夕日を眺めていたが、ラクシオはレインの腕を優しく引き、向かい合わせにさせた。とはいえ、レインの視線は床に向いている。

「国創りには、レインの力が不可欠だ。そして何よりも、私は一人の男として、レインと共に在りたい」

その言葉に弾かれ、レインは顔を上げた。様々な感情が溢れた。

しかし最も強い感情は確かに、幸せだった。

返事をしようと開いた唇が、震えた。

ラクシオはレインを見つめたまま、再び頷く。

「レイン、私と結婚して欲しい」

夕日の差し込む館の窓辺で、二人の影が重なった。

* * *

(建国帝妃は、幸せだったのだろうか)

夢見る乙女さながらにため息をつくマリアとは対照的に、レインの心は冷めていた。

建国帝妃は、物語ではこの上なく幸せな女性として書かれている。しかし、物語に書かれた内容は必ずしも真実ではない。

いきなり「あ！」と声に出して、マリアは居住まいを正した。

「突然押しかけてしまって、ごめんなさい。最近、兄様たちは何かと忙しいらしくて、寂しかったんです。ジクルス兄様はお仕事で、エル兄様は立太子の準備があつて……」

しょんぼりするマリアに微笑みかけて、レインは皇女らしい返答を返すことにした。そろそろこの長い朝食を終わらせても良いころだ。

「私でよければ、いくらでも話し相手になりますよ。今日のご足労頂きありがとうございます」

窓に目をやれば、すでに太陽はかなり高くにある。随分長く喋りこんでいたらしい。

マリアの表情が花が開くように、嬉しそうに変わる。そして王女はその表情のまま、意図せずしてレインの心に漣なみを立てる言葉をした。

「いえ、私はただ、レイン様とお友達になりたかったのです」

「……私と、友達にですか？」

声は柔らかく聞き返したが、レインの胸中は酷く落ち着かなかった。

しかし動揺は隠しきれていなかったらしく、マリアの笑みが引込んだ。

「ええ、お友達です。レイン様がよろしければ、ですが」

このままでは不味いと思ったレインは、微笑の仮面を付け直した。「勿論、私もマリア様と友達になりたいと思います」

言いながら内心で、途方も無い虚しさを押し殺していた。

(マリア姫は、私の正体も、これからの行動も知らない。知れば、友達など……)

九話 放火

ウォールディア城下の市場にはすっかり活気が戻り、露天商も増え始めた。まもなく日も暮れる時間柄、あちらこちらで店仕舞いこそ行われているが、反対に酒場などの明かりは灯り始めていた。

売り文句や馬車の往来する音が鳴り響く中、三人の男女が道の端で集まっている。

「しっかし、隊長も大変なこった。宰相代理が終わったと思ったら、ケイオスの姫さんを誑たぶらかさなきやならんとは」

頭を掻きながら言う男は、職人風の服装で、これといって目立った特長はない。

「確かにね……。軍人としても使えるだけ使われて、王族の役目も果たせなんて、同情するわ」

女性は商人の娘が少し粧めかし込んだような格好をしていて、物憂げに顔を伏せた。台詞は中々物騒だが、傍からは若さゆえの憂鬱に見えない。中々の女優だ。

「……シア副隊長、カック先輩、街中でそんなこと言って良いんですか？」

こちらはまだ幼さの残る少年だ。連れ二人の暴言にびくびくしている。

答えたのは女性で、口の端を歪める妖しい含み笑いを見せ、

「セルム、貴方が黙ってれば大丈夫よ」

と言った。

「死んでも言いません！」

「……シア姐さん、あんまりセルムを苛めんなよ……」

カックは頭を抱えるのだった。

紅龍部隊は現在、城下町の治安維持に借り出されていた。

ウォールディア城下町は平素、憲兵が巡回しているのだが、ここ数日はそれだけでは足りなくなった。ケイオス皇女が入国して以来、放火が続出しているのだ。憲兵の目を掻い潜って行われる犯行を防ぐため、使い勝手の良い……もとい、柔軟性の高い紅龍部隊は私服で城下に配置されている。

シアたち三人の任務は明日の朝までだ。ジクルスは部隊を半分に分けて一日交代とし、三人一組で巡察させている。本人も参加すると申し出ていたのだが、シアが止めた。

（隊長は目立つからね……あの無自覚イケメンめ。何のための私服警備だと思ってるのよ）

基本的に有能すぎる上官だが、自分の容姿を計算に入れることだけはできないらしい。新副隊長の特権を行使して止めなければ、本当に街に出てきただろう。

シアが思い出し苛立ちをしているのを敏感に察知したセルムは、すっかり話題を逸らすことにした。

「副隊長、もうすぐ人気がなくなりますよ。いつまでも話し込んでいては怪しまれませんか？」

「グツジョブ、セルム……あ、いや、なんでもないって。それより、俺と姐さんはともかく、いい加減セルムは目立つぞ」

下手な同調をしたカツクは脛を蹴飛ばしておき（変な悲鳴が聞こえた）、シアはセルムに頷いた。

「そうね……。セルム、今日のところは家に帰りなさい。後は私たちがやっておくわ」

「え、いいんですか？」

「ええ。たまには家族のところに行ってあげなさい。引継ぎも顔出さなくて良いから」

シアが副隊長に選ばれた理由は、剣の腕前だけではない。気配りの細やかさと、任侠味のある優しさを、ジクルスに買われたのだ。

日が暮れた。

「……で、なんでこうなるんっすか」

「歩幅を小さくしなさい。腕を肩に回して」

シアがセルムを帰した理由は、幼くして一人息子を出兵させた家庭への気遣いだけではなく、警備の都合でもある。

警備に割り振られた区域は、夜になると恋人たちが逢瀬する場所になる。子供セルムがいると悪目立ちするのだ。

「いや姐さん、俺も一応は健全な成人男子でしてねえ。非武装の姐さんに引っ付かれるってのは……」

「不愉快だろうけど、任務だと思って耐えなさい」

シアとカックも周りに合わせてデート中の振りをしているのだが、カックの言いたいこととシアの叱責は若干ずれている。

「いや姐さん、むしろ愉快ですけどねえ……」

普段シアには、投げ飛ばされたり打ち据えられたり刃物を突きつけられたりすることしかないのだ。スカートをはいて薄化粧までしている同輩の姿に、戸惑ったりもする。

(姐さんは俺のこと何とも思ってたねえもんなあ……)

シアは女性にしては大柄だが、それでも辛うじてカックのほうが長身だ。それにこうして密着していると、シアの体形までよく分かっってしまった、なんだか申し訳ない。

人口密度が高くなってきたので、演技のレベルを上げる。シアとは共に戦場を生き抜いてきた仲だ。慣れないこととはいえ、連携はたやすい。

「なあシア、人気ひとけのない所に行かないか？」

「いいわよ。貴方がシアって呼んでくれるなんて、久しぶりね」

無論、放火魔が現れそうな方に行くのだ。下心はそんなにない。シアの台詞にしても、率直な感想を艶っぽく述べたまでだ。

シアとカックは入隊前からの知り合いで、昔は互いに呼捨てだった。

* * *

大通りからは少し奥まったところにあるその酒場は、今日も賑わいを見せていた。

「ラピス、これを入り口横に頼む」

「はい！」

経営者の婦人が臨月に入ったため、現在は主人と住み込みで働く少女の二人だけが店に出ていた。まだ働き始めて一週間ほどしか経っていないにもかかわらず、少女の給仕振りは中々様になっている。

ラピスが店特製の炙り肉を運んだ先には、馴染んだ少年の顔。

「エル、今日も来てたんだ……」

「客に呆れ顔する女給とか初めて見たんだけど」

ニヤニヤ笑いながら軽口を返されたので、大げさに肩をすくめてやった。

「毎晩カードに興じるお金は、どこから出てるんだかね。自分で稼いでるようにも見えないし」

「毎晩勝てばいいのさ。……なんだその目は、イカサマはしてないぞ」

「どつだか」

疑ってるのか？ 当然でしょ、といった応酬をしつつ、ラピスは仕事に戻った。エルのカード仲間はまだ来ていないらしい。

初日こそ酒気に当てられたが、もう酒の臭いで気分が悪くなることはない。ラピスは椅子や客の足を器用によけながらカウンターに戻った。

すると、なにやら焦げっぽい臭いがラピスの鼻を突いた。

「マスター、野菜焦がしました？」

厨房に向かって大声で聞くと、客の数人が笑い出した。マスターは妻ほど料理が上手くない。たまにこんな失敗もするのだ。

「何言ってるんだい。今日は焦げてないよ」

手を拭きながらカウンターまで出てきて、マスターは眉をひそめる。ラピスが雇い主を笑い者にするつもりだったとは思いついたのだ。

「え、でも何かが焼ける臭いがしますよ？」

きょとんとしたラピスの言葉の後、ラピスとマスターと、炙り肉に噛り付くエルの脳裏に同じ事が浮かんだ。

最近、放火が多い。

そして間合い良く、店の中に煙が充満しだした。

「火事だ！ 皆、外に！」

最初に我に返ったエルの声に、客は次々と従いだした。最初は入り口に人が殺到したのだが、エルが再び「女と老人が先だ！」と言うと、不思議と混乱も収まった。

（エルの言葉って、妙な迫力があるのね）

ラピスはその光景をぼんやりと見守っていたのだが、

「女の子は先。速く行って」

「ラピス、来い！」

マスターとエルにせかされて、入り口に向かった。

店の外を歩いていた男女は、騒ぎを聞きつけ、煙の立ち上る酒場

まで走った。

阿吽の呼吸で二手に別れ、それぞれが反対向きに店の周囲を回る。しかし、火をつけたと思しき人間の姿は無く、二人は店の入り口手前で再開した。

入り口は風上になっていたので、そこには今しがた出てきたと思われる人々が溜まっていた。まだ店内に残っている人はいるようだが、押し合いをすることもなく一人ずつ出て来ている。

「カック、憲兵に連絡を」

「了解。姐さん、これを」

手渡したのは一本のナイフだった。服装的に武装のできないシアの分を、カックが隠し持っていたのだ。たとえ放火魔に出くわしたとしても、シアはナイフで応戦できるだろう。

カックが走り去る気配を感じつつ、シアは店の扉に目を戻した。

すると、店主らしきエプロン姿の中年男性の後に、一人の少年が続くところだった。

黒髪に瞳は深緑、細身　　なんだか大変、見覚えがある。

(あの馬鹿王子、こんな所に居たんかい！)

おそらく客の退避が落ちていたのはエルフォード王子の活躍によるものだとは思うが、手放しで褒めてやる訳には行かない。

シアはスカート姿にあるまじき歩幅でエルフォードにつかつかと詰め寄る。その傍には赤毛の少女がいたが、気にせずにエルフォードの襟首を引つ掴んで路地の奥に引きずり込んだ。

エルフォードは抵抗したが、シアは職業軍人である。こんなか細い若造に逃げられはしない。

付いてきた赤毛の少女以外の人影がなくなったところで、シアはエルフォードの頭をポカリと殴った。

「痛いっ！　くそ、兄貴の副官に捕まるなんて……」

「捕まるようなことをするほうが悪いのです。また勝手に抜け出して、カードでもやっていたんでしょう。第二王子の自覚も無く」

「あ、ラピスもいるのにはらしゃがったな！」

「身分を隠して逢引でもしてたんですか？ 隊長が聞いたらなんておっしゃるか……」

「兄貴は関係ないだろ！」

独り、ラピスは混乱するのだった。

（第二王子？）

十話 思惑(前書き)

2011・7・28 十一話 十話 に訂正

十話 思惑

後宮の最上階に設えられた王妃の居室は、一人の客人を迎えていた。

「こちらに御越し頂くとは、久しゅうございますね」

第一王妃の名に恥じない優雅な礼で、ロベリアは夫を迎えた。昼下がりの、貴婦人であれば昼寝をしてもおかしくない時間であるが、ロベリアの豊かな黒髪は几帳面に結び上げられ、ドレス姿にも乱れはない。

「急に済まん」

アランは護衛と侍女たちに下がるように指示し、ロベリアと共に細工の美しいテーブルについた。

王妃の居室では、ウォールディアのみならず、大陸の各国から高峰の技術で作られた家具が使用されている。例えばこのテーブルは、木組みの脚はウォールディア製だが、天板のガラスは南東の小国・シスタニア公国で作られたものだ。

侍女を下がらせたので、二人分の紅茶はロベリアが淹れる。この茶葉や茶器も、王国の技術の結晶だ。

「其方そなたとこうして茶を飲むのも久方ぶりだな」

「ええ。妹が知ったら驚くに違いありません」

「……イベリアか」

ふと、遠い過去を思い出すようにアランは目を細めた。ロベリアもティーカップを置き、同じ人物に思いをはせた。

アランの最愛の人であり、ロベリアの妹であった女性を。

「十六年。早いものですね」

ウォールディアの王は、生涯に三人の伴侶を持つことを許される。若き日のアランは、第一王妃として教養に優れたロベリアを選び、

第二王妃には、派閥争いを避けるため、ロベリアの実妹を迎えた。それがイベリアだった。

学問、芸術共に優れたロベリアとは対照的に、イベリアは何を取っても平凡な娘だった。しかし、何の打算もなく微笑み、傍にいる者を魅了してやまない娘だった。立場上荒んだ人間関係を持つことが多かったアランはいつしか、彼女を本気で愛するようになっていた。

紅茶を一口飲み、アランはロベリアを窺った。

「ロベリア、余に隠し事をしているだろう」

澄ました表情で、ロベリアも紅茶を口に含む。

「いいえ」

アランは大きく溜息をついた。しかし目は穏やかだ。アランは誰よりもイベリアを愛したが、ロベリアをこの上なく信頼していた。その感情は親友に向けるものに似ている。あるいは、戦友かもしれない。

「姉妹だというのに、イベリアとは大違いだな。其方の腹は読めぬ」
「陛下こそ。ところで、ケイオスの娘のことなのですが……」
「あの“神の愛し子”^{ライン・ファイオ}か。ジクルスはよくやってくれているな」
「ええ。ジクルスは妹に似て真面目です。今頃姫を誘って庭園にでもいますよ」

* * *

冬も近いが、城の庭園は寒椿^{かんつばき}などの植物が彩っている。

「今朝は妹がお邪魔したそうですね」

ジクルスは温室の扉を開きつつ、当たり障りのない話題をふる。シスタニア公国の職人に建設させたガラス張りの温室の中は、外より随分暖かい。こちらには、時期をずらして栽培した春の花が咲いていた。

部下に任せきりになってしまった放火魔と、相変わらず城下町を出歩く弟のことが心配だが、今日は副官が見回りをしている。おそらく大丈夫だろう。

今は貴公子面きうしめんをしてさえいれば良い。

皇女は長い髪を丁寧に梳かし、質素な模様の服を身に纏っていた。侍女頭の報告によると、身支度はすべて自分の手で行っているらしい。それはケイオスの風習なので驚きはしないが、随分と薄化粧だ。ジクルスの好みではあるが、敵国で身を守らなければならぬ皇女の行動とは思えない。はつきり言うと、男に取り入る気が感じられない。何か企みがあるのだろうか。

(美人を前に、こんな不毛なことを考えなきゃならぬとは……)

内心のため息を悟られないように努力していると、銀色の瞳が予想外に近くに来た。

「邪魔だなど……。マリア様は愛らしいお方ですね。日溜りのような」

ジクルスの顔を真っ直ぐに見据えて微笑み、レインは応えた。

日溜りとはなかなか的確な表現だ、とジクルスも思う。年の離れた異母妹は、見ているだけで心が和む。

もっとも、異母妹の特徴はそれだけではない。

「王位第二継承者にするには不安なところも多いですが、あの子は人の感情の機微に鋭い。きつとウォールディアに欠かせない人物になる、と期待しています」

マリアは内気な分、周囲の人間の善悪を見極める力がある。それはひょっとすると、エルフォードをも上回るかもしれない。しかも

ああ見えて、第一王妃譲りの芯の強さがある。

レインは共感するように頷いた。

「私もあんな妹が欲しいものです。ところでジクルス様は、どうして王位継承権を破棄なさったのですか？」

「王位を巡る争いを避けるためです。それに、エルフォードは私よりよほど、王に向いている」

何気なく言っておき、この件に関しては深入りされないようにする。レインも追及することはせず、手近な花に頬を寄せた。

それから、しばし沈黙。ジクルスがガラス越しに空を眺めていると、レインは先ほどとは別の一輪を指し、

「ジクルス様、この白い花を部屋に飾りたいのですが……」
と上目遣いに聞いてくる。

花には詳しくないジクルスだが、レインの言う小弁の花には見覚えがある。

「鈴蘭ですか？ その花には毒がありますよ」

王位継承権を持っていた昔、自衛の為に毒について調べていたのだ。観賞する分には可憐な鈴蘭も、使い方によっては猛毒になる。

レインは弾かれたように鈴蘭を離れた。まだ手折ってはいなかったので、植えられたままの小さな白が左右に揺れた。

「……知りませんでした。お許しください」

妙に静かだ。花を手放す素早さの割に、声には怖れや驚きが込められていない。

ジクルスの勘が違和感を告げる。ジクルスは己の直感がある程度は信頼していた。その勘が、優れた剣術や並外れた膂力よりもよほど、ジクルスの命を救ってきたのだ。

「謝ることなどありません。それより、御手を失礼します。怪我を
しては大変だ」

さりげなく手をとると、やはり硬い。ジクルスの副官も女性だが、彼女と同じくらいは剣を握っているのではないだろうか。皇女が軍

人と同程度の鍛錬をしているなど、考え難いが。

怪我はなさそうだ。

「大丈夫そうですね」

「有難うございます」

それなりに見目の良い男女が微笑みあう光景は、温室の外で花を摘む侍女たちを通して城中に噂を呼ぶこととなる。しかし、ジクルスの疑念は深くなる一方だった。

(おそらくレイン姫は、毒草を求めたのだ)

それが有毒だと知った上で、知識を隠して。

* * *

ロベリアは二杯目の紅茶を夫のティーカップに注いだ。

アランは摘んだ菓子を飲み込む。

「ジクルスが勤勉であることは疑いようのない事実だが、エルフォードはどうしているのだ？」

ああ痛いところを突かれた、とロベリアは嘆息する。

「見聞を広めております。……どうやら広い人脈を持っているようで、手を打ちにくいのです」

ロベリア自身が腹を痛めて産んだ息子だ。エルフォードは可愛い。ただ困らせられる回数は格段に多い。

ずっと澄ましていた妻の表情が苛立ったのを見て取り、アランは声を立てて笑った。

「お前をしてそう言わしめるとは、あやつには相当な人望があるの

だろう。王たる身に必要なことだ」

「人望はともかく、ジクルスの半分でも王族の自覚があればいいのに」

幼いころから数えても、ジクルスの我侭はたった一つ、王位継承権の破棄だけだった。

十一話 思案（前書き）

大変お待たせしました。少し短めではありますが、お楽しみください。

2011・7・28 十二話 十一話 に訂正
2011・9・20 エストレジア ストレイジア に統一

十一話 思案

レインは部屋に、できるだけ使用人を入らせないようにしている。ケイオスに広く浸透する風習であるが、女性は身分が高くとも自らの手で身支度を行う。皇女たるレインも例外ではなかった。朝は自力で起床し、ほとんどの用意を一人で済ませる。流石にウォールディアのドレスを一人で着るのは困難なので、そこで侍女を呼ぶが、手伝いを頼むのは着付けのみだ。

マリアと食事をし、ジクルスと庭園を歩いた次の日も、レインの朝は早かった。

レインは床についた途端に深い眠りに落ち、その分目覚めはすこぶる良い。目が覚めるや否や起き上がり、部屋の窓を開けた。早朝の冷たい風が部屋に吹き込み、カーテンを揺らす。

窓を開け放ったまま鏡台に向かい、櫛を取り出して髪を梳かす。立てば膝ほどの長さがある髪は、高級な板張りの床に流れ、毎朝のことながら梳かしづらい。

(こんなことなら、脱走したときに切っておけばよかった)

切らなかつたのは、女らしさへの執着か、捕まって嫁がされる事態に備えてしまったからか。

色合いはありふれた茶色だが、レインの髪は美しい。梳かされるに従って艶を増し、朝日を弾いた。

朝風は既に冬のもので、レインの瘦身を容赦なく冷やす。しかし、レインは外気に当たるのが好きだ。人の息に汚されない清らかな風を全身で感じると、生きている実感が湧く。

ウォールディア王国での暮らしは、平和そのものだ。レインの半生を振り返っても、己の身に降りかかる危険をここまで無視できた期間はさほどない。

偽りの平和だとは、分かっているけれど。

* * *

逃亡が失敗に終わり、レインは為す術なくケイオス帝国城に連れ戻された。旅の汚れも落とさないうまま玉座の前に引き出され、後ろ手を縛られたまま罪人よろしく突き飛ばされる。耐えられないほどではなかったが、耐えてしまえば眼前の人を怒らせるだけだ。無様に転んでおいた。ここ数日飲まず食わずが続いたせいで、身も心も疲れ果てていた。

緋色の絨毯を頬に感じながら、惨めな思いを噛み締める。彼^か人はおそらく冷笑しているだろう。確認するまでもない。

抵抗しなかったせいで、口の中が少し切れた。血の味がする。

彼の人は、レインの遙か上から声をかける。

「久しいな、穢れた娘よ」

玉座に腰掛けるその男は、優越感に酔った様子で笑う。レインは思考を放棄した。上体を起こす気にもなれない。

「やはり身の卑しさは隠しきれぬか。神^{レイン・ファイオ}の愛し子”が聞いて呆れる。どうした、口が利けないのではあるまい、こちらを見て何か申せ」

この男はレインの異母兄であり、病床のケイオス帝に代わって政治の頂点に立つ皇太子だ。名を、ストレイジアと言う。レインより十は長く生きているはずなのに、幼い感情が目立つ。

レインが無視すると、先程レインを突き倒した武官に、後ろ手の縄を引っ張って無理やり起こされた。手首に縄が擦って痛かったが、声を立てたくなるほどではない。表情すら動かない。

武官はレインの背中を蹴飛ばして怒鳴る。

「何か申せと仰おしっているだろう！」

レインは黙っていた。反抗しているのではなく、ただ何も考えたくなかったのだ。ストレイジアの子供じみた優越に付き合うのは億劫だった。ただ手首の痛みだけが現実で、後は夢でも見ているかのような、ぼんやりとした感覚しかない。

咳が出た。

ストレイジアは小太りの体を震わせて満足気な表情を浮かべる。それから突然、飼猫にでも語り掛けるような薄ら優しい声に変わる。

「妹よ、お前に役目をやるわ」

レインははつきりしない頭で、不審に思った。ストレイジアはこれまで、唯の一度もレインを妹とは呼ばなかったからだ。

皇太子は続ける。

「役目だ。嬉しかろう、穢れたその身も、余の役に立つのだ。お前は卑しき母親に似て容貌が優れ、武術の腕は余の近衛五人にも勝る。何より、父帝の血を引く真正銘の皇女だ」

嫌な予感がした。これまでレインの異母妹にあたる貴族腹の皇女を引き合いに出してレインを認めない発言ばかりを繰り返してきたストレイジアなのに、レインに流れる皇帝の血を強調している。

「お前をウォールディア城に送る。そこで、彼の国の王子を二人とも、殺せ」

断ればどうなるかなど、態々想像するまでもない。レインに逃げ道はない。

これまでだって、誰かを殺して生きてきたのだ。あと二人増えたところで、何も変わらないだろう。

レインは囁れた声で、「御意」と答えると、意識を手放した。

* *

いつそのこと、このまま大人しく生き抜いてしまえるのではないか。王子暗殺などせずに。

軍属のジクルスはともかく、エルフォードの方もレインを怪しんでいる。暗殺は至難の業だ。だが、このまま暗殺などやめてしまえば？

レインの思考を遮るように、開け放った窓から一羽の鳩が舞い降りた。その足に、紙繕りが結び付けられている。

嫌な予感がして、レインは青ざめた。

鳩の紙繕りを解き、開く。

『逃のがれられると思うな』

その雑な筆跡には見覚えがある。

「ゼムか……。分かってたさ。私に選択権などないんだろう」
人質を取られているのだ。従うしかなかるう。

レインがケイオス帝国 ストレイジアに背けば、レインの育て親であるトアンが殺されることになっていいる。ゼムは賢くも情のない男だ。レインがトアンを慕うようになるのも、計算されていたのかもしれない。トアンはゼムの実の妹だが、宣言した以上本当に殺してしまうだろう。そういう男だ。

レインは深く深呼吸をして表情を消すと、ドレスの着付けのため

に侍女を呼んだ。

すぐに年配の侍女が一人、数人の若い侍女を連れてやってきた。無表情のレインにも怯まずに笑顔で接してくるこの年配の侍女には好感を持っている。ただ、これからすることを思うとあまり親しくなる気にはなれないが。

「レイン様、本日は両陛下が朝食にお呼びです。お召し物はいかがされますか？」

「では、いつも通り質素ながらも、上等の生地のものをお願いします」

「かしこまりました。色合いはどうされますか？」

「任せます」

「では、レイン様の瞳が映えるよう、深い青に致しましょう」

了解の意を込めて微笑むと、若い侍女たちがレインに見蕩れてため息をついた。レインの容貌は、傾国の美女と呼ばれた母親には及ばないものの、相当整っていたからだ。

（王と王妃が揃うとは……厄介なことになったな）

ウォールディアの王は名君と讃えられている。王妃もまた、王と並ぶ政治手腕で名高い。二人に怪しまれないようにするのは、至難の業のような気がした。

十二話 得体の知れぬ（前書き）

あまり面白みのある話ではありませんが、物語の展開上必要ですの
で、読んでいただければ幸いです。

2011・7・28 十三話 十二話 に訂正

2011・12・3 「ケイオ大隊」 「ケイオス大隊」 に訂正

十二話 得体の知れぬ

城内にある第一王子の執務室に、煤けた普段着の男女が並んでいた。彼らの正面に腰掛ける軍服は短い赤髪越しに頭を掻き、苦い表情でペンを置く。

「それで、犯人は見当たらなかったんだな？」

「はい」

ジクルスの問いに、シアは俯いたまま悔しそうに肯定した。警戒に当たりながらこの結果を出すのも失態だが、もう一つ報告しておかなければならないことがある。

ああ言いたくない。シアが覚悟を決めかねていると、意外にも隣のカックが口を開く。

「中の人間はエルフォード王子の適切な指示で全員無傷でしたが、酒場は全焼。延焼も一軒あり、そちらは半焼しました。エルフォード王子はどうやら身分を隠してその酒場に通っていたようで、ラピスという赤毛の女給を気にしていました」

ジクルスの指先がぴくりと動く。

返ってきたのは、先ほどの質問よりも低い呟きだった。

「あの馬鹿、関わるなど言ったのに……」

「え？」

シアの反射的な聞き返しには応えず、ジクルスはしばし考え込んだ。

* * *

レインは特に理由もなく後宮の中庭を歩いていた。やはり侍女はつけないで貰っていたのだが、あちらこちらから視線を感じる。単に異国の姫への好奇心からのものがほとんどだが、時折刺すように冷たい視線も感じる。おそらく、戦争犠牲者の身内だろう。

仮に己がウォールディア王国の一般人で、大切な人を戦争で失い、目の前にケイオス皇女がいたとしたら……。

考えて、自分なら皇女より直接手を下した人に復讐するだろう、という結論に至ってしまった。しかし、それが誰なのかわからなければやはり、皇族を恨むのだろうか。

不意に、斜め後ろから高めの声がかかった。

「レイン様、難しいお顔でいらっしやいます。考え事ですか？」
マリアだ。ピンクを基調とした花柄のドレスが、よく似合っている。

敵意や殺気には敏感なレインも、それらがまったくない気配は読み難い。近くまで来ているのに気付かなかった。

とりあえず笑って誤魔化そうとしたのだが、それよりも早くマリアはレインの右手を両手で握った。

「此度の戦争で、貴女に憎しみを向ける者もいるようですね。誰かが許さねば終わらないという事実気付くのは大変ですが、彼らもいつか分かるでしょう。どうか、お気を落とさないでくださいね」
どうやらマリアは、レインが思っていた以上に鋭い感性を持っているらしい。言われてようやくレインは、自分が周囲の視線に少し辟易していたことに気付いた。

これは強敵だ、と思いつつ微笑む。

「有難うございます」

マリアもにっこり笑った。それからふと中庭の入り口に目を向けたマリアは、驚いた声でそこにいた人物を呼ぶ。

「エル兄様？」

レインはそちらには気付いていた。マリアと話す前から、一人異質な気配を感じていたのだ。

エルフォードは愛想笑いをしながら歩いてきた。

マリアが駆けていって、その勢いそのままエルフォードに抱きついた。エルフォードはたいしたことに転ばずに妹を受け止め、その頭を髪が乱れない程度によしよしと撫でた。

その体勢のままレインを向く。

「レイン姫、ウォールディアでの生活には慣れましたか？」

王子にしては質素な服の腰には、細身の剣が取り付けられている。エルフォードとて剣くらい使えるのだろうが、帯びているのを見るのは初めてだ。

マリアは何かを察したらしく、レインに軽い挨拶をすると立ち去った。後には、レインとエルフォードのみが残される。

エルフォードの愛想笑いは、レインのそれと同じくらい白々しい。そもそも、アラン王の方針で、エルフォードはレインに関わらないことになっていたのでなかったのだろうか。

「立ち話もなんですから、お掛けください」

エルフォードは中庭に備え付けられたテーブル式を指差す。愛想笑いは半分くらいに減っていた。レインも似たような表情をして座った。

背の低いエルフォードはレインを見上げつつ、油断ならない目つきで話し始める。

「ここしばらく、城下で放火が相次いでいまして、そのせいで兄は中々姫のお相手をできないのです」

「左様でございますか。ジクルス様がお怪我をなさらなければいいのですが……」

そこで王子はふっと笑う。

「その心配はないでしょう。兄は強い」

「お噂は伺っておりますが、万が一ということもございましょう」

戦時中、ジクルスが小隊一つでケイオス大隊を破ったのは有名だ。しかし、戦歴の勇者でも死ぬときは死ぬ、とレインの思考は冷たい。「ほう、ケイオスの女性は慎重なのですね。大抵の貴婦人は兄を英雄化して勝手に安心するのに」

「いいえ、私が変わり者なのです。剣を嗜んでおりまして、その際師がよく言ったのです。『皇女の腕は大抵の兵士にも及びませんが、それでも万に一つは刺客を負かすことがあるでしょう』と」

実際にはずいぶん違う言われ方をしたのだが、皇女として遺脱しすぎないよう修正を加えておく。

「良い師をお持ちのようだ」

これには本当に面白がられた。

「まったくです」

冗談っぽく肩をすくめておいた。

エルフォードはレインより三つ年下だが、侮れない人物だ。レインは無意識に武器になりそうなものを探してしまった。その行動には気付かれなかったものの、エルフォードは隙のない微笑を浮かべなおした。

「で、件の放火魔なのですが、兄の隊が搜索くたんしているにもかかわらず、中々捕まらない。何か強大な組織が背後にいるのではないかと疑われているのです」

これが狙いか。私を揺さぶることで、ケイオス帝国の干渉を探るつもりだな。

確かにあの異母兄なら、放火などという国家間では余りに小さな嫌がらせもしかねない。

レインは怪訝な表情を浮かべることにした。

「放火に、組織ですか。それは随分些細ですね……いえ、実際に住みか
処を失った人に見てみれば些細というのは不謹慎ですが、大きな組
織が行うにしては、利のないことかと」

「ほう。では、単独の者が？ 確かに、一度に火を放つのは一軒で
すが」

「その線が強いと思います。組織立った犯行であれば何軒も燃やす
のでは？ 何らかの思惟があるのなら話は変わりますが……」

「仮に思惟があるとすれば、どうでしょう」

「仮に……例えば、ジクルス様を誘き出そうとしている、などでし
ようか？」

深くは考えずに予想を述べたのだが、エルフォードは不意をつか
れたような顔をした。それまで年齢にそぐわない狡猾そうな表情を
続けていただけに、本来の幼さが際立つ。

「そうか。確かに兄上なら、いつか出て行くだろう……。レイン姫、
礼を申します」

「いえ、私は推測を述べたまでです」

妙に毒気を抜かれてしまい、互いに話題をふれなくなったときだ
った。

侍女の格好をした女が三人、中庭に出てきた。手には茶器を持っ
ているのだが、どことなく殺伐とした雰囲気漂わせている。

レインは気付いた。

彼女らは侍女ではない。レインと同じ種類の 殺しを生業にす
る人間だ。

そのことに気付いたのか気付かなかったのか、エルフォードの表
情も僅かに硬くなった。

狙いはレインか、エルフォードか。

侍女たちは丁寧にお辞儀をし、完璧な作法でレインとエルフォー

ドの前に紅茶を出した。毒入りはどちらかか、両方が。

飲まねば怪しまれるだろうから、口に含むかとレインがティーカップを持ち上げると、エルフォードが勢いよく立ち上がった。

エルフォードは険しい表情でレインを制して、己のティーカップを掴むと侍女の眼前に突きつけた。

「飲め」

短く一言、聞く者に恐怖心すら与える冷たい声だった。

侍女たちはすぐに表情を変えた。後宮の侍女にふさわしい清楚さは消え、親の敵でも見るような目でエルフォードを睨みつける。そして三人は侍女の制服である丈が長く膨らんだスカートの下から、それぞれにナイフを取り出した。慣れた動きだ。

エルフォードは茶器を捨て、帯びていた細身の剣を抜いた。しかし、刺客の人数には負けてしまっただろう。レインは思わず立ち上がった。

何も考えられなかった。

何故、私は動いているのだろうか。

あたかも暗殺対象を守るように。

気がつくくと、レインの足元には首から血を流した刺客が二人、痙攣していた。レインは刺客から奪ったナイフを握っており、その刃先は正確に、最後の一人の刺客の頸動脈に添えられている。

「レイン姫、交代します」

エルフォードの細剣がナイフに取って代わるのを確認し、レインは手を引いた。エルフォードの声から、その感情を読み取ることはできなかった。

レインは椅子に座り込み、浅い呼吸を繰り返した。何かが恐ろしかった。自分が自分でなく、得体の知れない何かに動かされているような感覚が。

人を殺した回数など、もう数えるのもやめた。それなのに、体が震えていた。

遅れて駆けつけた衛兵が見たのは、刺客に剣を突きつける軍籍でない方の王子と、返り血を浴びて自失する異国の皇女だった。

十二話 得体の知れぬ（後書き）

んー、いささか急だったでしようか。

十三話 紅（前書き）

この話を投稿する前に、十話が飛んでいたことに気がきました。番号を詰めましたが、内容に変化はありません。ご迷惑をおかけしました。

十三話 紅

暗殺者に襲われた皇女を気遣うという名目の下、その日予定されていた国王夫妻との会食は中止された。

事件現場が後宮という王族以外の男の立ち居が禁止されている場所ゆえ、後始末と詳しい調査はジクルスの隊に回された。

ジクルスは副官の手を借りながら暗殺者の死体を調べた。連れてこられたのは女であるシアだけだったので、居合わせたエルフォードも手伝っている。

「しっかし、この暗殺者たちは、相当な訓練を積んでいる。本当にレイン姫が仕留めたのか？」

生かしておいた最後の一人も結局、服毒自殺を遂げた。

「ああ、全員だ。剣を嗜むとは聞いていたが、あれほどの腕とは……しかも、奪ったナイフでだ」

腕を組むエルフォードも唸る。それから小さく、「シア以上かもしれない」と付け加えた。これにはジクルスも驚く。なにせシアは部隊においてジクルスに次ぐ剣の使い手だ。元々精鋭をそろえた部隊であるから、ウォールディア全軍を見ても屈指だろう。

エルフォード自身は大して剣に覚えがあるわけではないので、シア以上と評するレインのそれは、シアよりずば抜けて優れているのだ。

「隊長、言いづらいのですが……」

「黙っておけ。どこに耳があるか分からない」

「はっ」

シアの言わんとしていることは分かる。ジクルスはレインの到着時から疑っていたことだ。エルフォードも普段の軽薄な行動からは

おおよそ想像のつかない気難しい表情だ。

「……まあ、考えても仕方がない。とりあえずはこの者たちの素性を探ろう。シア、暗殺者の素性を洗え。城下の班は残りの人員で組み直す」

ジクルス自身は後宮を歩くと碌なことがない（侍女に秋波を送られたりする）ので、ここは副官に任せて引き続き司令塔だ。安全な場所から命令だけするのはジクルスの性に合わないが、効率を考えると致し方ない。

城下町の放火騒ぎも解決しないままであるのに、ジクルスの仕事は溜まる一方だった。そして、終わる見込みのないそれらがもう一つ増えたのは、その次の日のことだった。

書類仕事の息抜きがてら城下町を視察しようと城門を出たところで、ジクルスは一人の少女に袖を引かれた。

「あの、……エルという十五歳くらいの男の子を知りませんか？」
ツインテールの赤毛、意志の強そうな金色の目　自分が女だったらこんな風になったのではないかと思うような少女が、おっかなびっくりジクルスを見上げていた。

眩暈がした。

「すみません、普通分らないですよね……」

少女は語尾を小さくして、しゅんとなった。

「あ、いや、分かるが……」

「分かるんですか！」

今度ははつきりと、金色の目を輝かせた。感情の起伏が激しい娘だ。

おそらく、エルフォードに会うためだけにここまで来て、けれどどうすればいいのか分からなくて城から出てきたジクルスに「か何か声をかけたのだらう。賢くも、エルフォード王子ではなくエル少

年を探すことにしたらしい。両者が同一人物であることは、副官がばらしたはずだ。

ジクルスが取り乱したのは一瞬で、軍人らしい自制心が紳士的な表情を作る。

「お嬢さん、君の名はラピスだね？」

「は、はい！」

元気に返事をして、小さく「貴方様のことは存じ上げませんが……」と付け加えた。

それはそうだ。弟を迎えに行ったとき、少女の位置からはジクルスは逆光だった。

「とりあえず、エルの知り合いだと思っでいて。エルにはちょっと合わせられないけれど、代わりに用件を聞こう」

すると、今度は目の輝きを引っ込めて、気まずそうな表情になる。

「ええ、その、仕事の斡旋というか、紹介というか……」

「『仕事が欲しい。住み込みだと尚良し』ってところかな？」

「あつかましいですよ……」

とりあえず、あまり大勢の目に晒してはいけない。ラピスに可哀想だが顔を隠すように指示をして、ジクルスは彼女を執務室に招いた。

* * *

路肩に止められた小さな荷馬車に、雇い主だった夫妻は少ない荷物を積み込む。それを手伝ったラピスは不意に、身重の婦人に手を引かれた。

「ラピス、ごめんなさいね。店さえ無事だったらあなたを雇い続け

るのに」

熱くなつた目の奥を誤魔化すために、ラピスは首を左右に振つた。赤いツインテールがふるふると揺れた。

「いいんですよ、ハンナさん。私は気楽な身の上ですから。それよりも、元気な赤ちゃんを産んでくださいね」

放火で失つた店の主人夫婦は、遠くの親類の元に身を寄せるらしい。ラピスは解雇されることになったが、彼らは「一緒に来るか？」とさえ聞いてくれた。流石にそこまで甘えては悪いと辞退したが、短期間働いただけの素性の知れぬ娘にここまで親切にしてくれることに、胸が熱くなった。

きつともう、会うことはないだろう。

妻を馬車の中へ誘い、主人はラピスの頭に手を置いた。

「少ないが、今日までの報酬だ。小分けにしてあるから、鞆に少し、ポケットに少しとばらばらの場所に持ちなさい。物取りにあつたときに一つを置いて逃げられるように」

「有難うございます。どうかお元気で……」

姪っ子にでもそうするようにラピスの頭をくしゃくしゃと撫で、労働期間を考えるとやや多い貨幣の袋をラピスの腕に押し付けた。

「え、こんなになんて申し訳ないです！」

「いいから取つて置きなさい。私と妻は大丈夫だから」

我慢の限界だった。養母と決別するときには気配すら見せなかつた涙が、ラピスの頬を伝つた。

こんな両親が欲しかった。親戚でもいい。ずっと一緒にいられる肩書きがあつたらよかつたのに。

「あらあら、かわいい顔が台無しよ」

馬車から降りてきたハンナが、エプロンの裾でそつと涙を拭つてくれた。

夫妻はラピスの身の上について何も聞かなかつたし、それに甘え

てラピスも何も話さなかった。けれど別れる今、彼らに知って欲しいと思った。話さないと、ラピスがどれだけ感謝しているか伝わらないと思った。

嗚咽の混ざった声で、それでも顔だけ笑って言った。

「だってあたし、実の親に捨てられた子供なんです。養父母には疎まれて育ちました。こんなに優しくしてもらったことないんです。だから……」

ハンナは黙って、ラピスを強く抱きしめてくれた。お腹の赤ちゃんは大丈夫かとラピスが不安になるほど、強く。

温かかった。

* * *

気丈な子だ、と感心した。身の上話をする間、一度として自分を哀れむことも、同情を引こうとすることもしなかった。ジクルスの亡き母と生き写しの少女はしかし、イベリア王妃より遥かに逞しく成長したらしい。

母上、貴女の娘は強く育ちました。戦争も終わりました。それでもこの子に出自を教えることを、貴女はお許しにならないのでしょうか。

執務室の扉がノックされ、同時に凜とした声が「ロベリアです」と名乗る。ラピスを連れ込むと同時に侍女に預けた走り書きを、受け取ったようだ。

「どうぞお入りください」

ジクルスはほっとしたが、ラピスは青ざめて「王妃様!？」と小声で悲鳴を上げた。

ロベリアは相変わらず威厳の漂う佇まいで、その威厳を目の当たりにしたラピスは反射的に平伏してしまった。王妃は一応膝をついたジクルスに頷き、ラピスに立ち上がるよう言った。刹那、ジクルスやエルフォードに時折、マリアにはもう少し頻繁に見せる、慈愛に満ちた微笑がロベリアの美貌を彩った。ラピスは先ほどの緊張を忘れて、率直に見蕩れている。

「他人の空似是間々あることです。今知らせるには、時が早すぎます」

ジクルスに向き直った表情は為政者のそれで、その言葉の意味をジクルスは正確に読み取れる。ラピスの身の上は隠されるのだ。

「御意、王妃陛下。しかしこの娘は完全に寄辺よるへをなくしたようです」
その返答はロベリアも予測していたようだった。

「後宮の侍女……素質次第では、貴方の隊でもよいでしょう」

素質とは、言うまでもなく体力や戦闘の才覚だ。ジクルスと両親を同じくする妹である以上あってもおかしくない。そしてケイオス皇女レインのこともあり、現在は後宮よりもジクルスの部隊のほうが安全だろう。

「ラピス、体力に自信はあるか？」

花咲く年頃の娘に尋ねるのは気が引けるが、本人の希望次第だ。

ジクルスは女性の副官を言い訳にして聞いた。すると、ラピスは元気に即答した。

「はい、同じ年頃の男の子にも負けません」

「マジか」

思わず市井の言葉で低く呟いたジクルスに、ロベリアが噴出ふきだしかけた。ラピスは仕事を得る機会を逃すまいと畳み掛けた。

「根性だってあります。きっと兵士となってもお役に立てます」

金色の目がきらきらしている。

ああこの子、俺の妹だ。ジクルスは決して口に出せない感想を、残念ながら抱いた。

「決まりね。ジクルス、正式に名乗りなさい」

可笑しそうに念を押すロベリアも、ジクルスと同じことを思ったのだろう。剣術に魅せられた、幼い日のジクルスを。

一方ラピスは嫌な予感がしたらしく、「え、ジクルスって……」などと呟いている。

溜息を一つ噛み殺し、ジクルスはラピスに名を明かした。

「御意。では改めて、我が名はジクルス。元は第一王子だが、現在は一兵隊を指揮している。後ほど適性を確認させてもらうが、その結果次第では君の上官になる」

「第一王子殿下！？　じゃあ、あたし、じゃない、私が試験を受ける隊って……！」

こういうときに、隊に名前をつけなかったことを後悔する。ジクルスが言葉を選んでいると、ロベリアが楽しそうに口を挟んだ。

「巷^{ちまた}では“紅龍部隊”と呼ばれているわ」

ラピスのただでさえ大きな眼が、更に大きく見開かれた。

(エルフォードにどう説明しようか)

弟に「関わるな」と言いつけてしまった手前、ジクルスは頭を抱えることになった。

十四話 その手は血に染まり（前書き）

お久しぶりです（汗）。

十四話 その手は血に染まり

暗殺騒動から二週間ほど経った。副官の調べでは、侍女に扮した三人はウォールディアの下級貴族だったが、いずれも数年前に戸籍上では死んでいた。それも、川に流されたり海に身を投げたりと遺体を確認できない死を遂げたとされている。彼女らの生家が事件に関わっているのかはまだ分かっていない。

ジクルスは副官の報告を聞きながら、朝食を飲み込んだ。

「御苦労。この先は王妃陛下の領分になるだろう。シアは城下の警備に合流しろ」

「はっ。しかし、ラピスのことはどうされますか？」

ラピスは結局、紅龍部隊に起用された。隊の面々には、「亡き母と生き写しの容貌を持つため、王妃陛下が城に上げた」と苦しい説明をしてある。ジクルスの複雑な立場を察してくれたかのように、隊内から疑問の声は上がらなかつたが、エルフォードが隊の様子を見に来る回数が増えた。

「お前と組ませろ。カックとセルムは引き続き二人組だ」

了解したシアは、王族に向ける最上級の礼をして執務室を後にした。普段は上官に対する略式の礼をするが、城内では改めるのだ。

同性の誼よしみが、シアは短い期間で随分ラピスのことを気に入ったらしい。ラピスが訓練を受ける様子もこまめに報告してくる。

ジクルス自身も別の用事があつたので、副官を見送った後、上着を羽織って執務室を後にした。

本格的な冬を迎えたため、城を一步出ると寒い。行き先の後宮と城との間には屋根壁の付いた渡り廊下とてあるが、父王が使うことが多いのでジクルスは非常時以外用いない。

後宮の入口に立つ女衛兵は、当然ながらジクルスを素通りさせた。その様子を見た数人の侍女が色めき立っていたが、顔を向けないようにする。ここで愛想笑いを返してこじれた経験があるのだ。王位継承権を破棄したとはいえ、ジクルスはこれからも要職に就き続けるだろう。エルフォードがマリアが即位した暁にも、大貴族となることは間違いない。そう考えた下級貴族の娘たちがあわよくばと思うのは道理だ。しかし、ジクルスの結婚は政治的駆け引きの内と決まっている以上、倫理にもとる行動はとれない。

そうこう考えるうちに、目的の部屋の前まで来た。後宮の中で王城に最も近く、広い部屋だ。

ジクルスが王妃に呼び出される頻度はさほど高くない。効率重視のロベリアは、伝達事項くらいなら書簡で済ませてしまふのだ。それが、今朝は呼び出された。

「よく来ました、ジクルス。今日は貴方に相談があります」

朝も早いというのにロベリアの身支度は完璧だ。侍女は既に下がらせてしまっている。退出を戸惑った女衛兵も、「あなたたちが束になるうと、ジクルスには敵いません」と身も蓋もないことを言うて追い出してしまった。

「王妃陛下の一日が恙なくありますように。して、私に相談とは？」
「ケイオス視察の件です」

終戦時からケイオス帝国各地にはウォールディア軍を駐屯させて治安維持に当たらせているが、王侯が直接訪れたことはない。一年ほど経つこの頃、ジクルスもしくは師団長クラスの間人が直接視察に訪れる話が持ち上がっているのだ。

ロベリアは椅子に腰かけて上品な所作で紅茶を口に含んだ。勧められたジクルスも、作法を守りつつそれに習う。

「昨晚、陛下が貴方を遣わすとお決めになりました。規模は抑え、学者を五人派遣するに留めます。サザール將軍の隊を護衛に付けな

さい。出立は明後日とします」

「私の部下はいかがしましょう」

「引き続き城下の警備に当たらせなさい」

直属の戦闘部隊を持つているのに、他人の護衛を受けるとは奇妙な話だ。サザール將軍には何度か会ったことがあり、有能な人物であることは分かっているのだが、將軍自身がそうであるように隊には貴族が多い。実力重視の隊を率いている身としては不安がある。

ただし、ロベリアがここまで述べてきたことは相談ではなく決定事項だ。命令と言い換えても良い。ジクルスはいくらかの不満を飲み込んで了承した。

「相談はここからです。ジクルス、ケイオス視察にレイン姫を連れていくべきだと考えますか？」

暗殺騒動以来も、ジクルスはロベリアの指示で時折レインの元を訪れていた。最初から影のある人ではあったが、こここのところの沈み様は並々ではない。ただ励ますことだけを考えるなら故郷の土を踏ませることは有効かもしれない。

しかし、それはレインが普通の皇女だった場合だ。

ジクルスは周囲に人の気配がないことを注意深く確認した。

「申し上げます。レイン姫と此度の暗殺者との因果関係については不明ですが、私はレイン姫自身が何らかの思惟の元この王宮に送られたのではないかと考えております」

先を続けると目で示された。

「まず、彼女の手です。あれは並大抵でない剣術の訓練を積んでいることを物語っています。具体的には、私の副官である女性と同程度、あるいはそれ以上です。腕は細いながらも、動作を観察するに見た目以上の腕力があります」

次に、以前庭園を案内した折、彼女は鈴蘭を求めました。毒があることを指摘すると手を放しましたが、不自然さは拭えません。

そして、三人の暗殺者を返り討ちにした件もあります。背に一人を庇いながら素手で三人を相手取り、傷一つ負わなかった。エルフ

オードの証言から推察するに、彼女の武術は宮廷で習うようなものではなく、敵を殺すためのものです」

そこまで言っ言葉を切ると、ロベリアは瞑目してしばし考え込んだ。

「つまり貴方は、レイン姫が暗殺者であるとも言いたいのですか？」

「はい。全く考えのない話ではありませんが、ケイオス皇太子であれば打ちかねない手です」

ケイオス帝は長く病床に伏せており、帝国の実権を暗愚な皇太子が握っているのは有名な話だ。ジクルスの隊が人数の遙かに上回るケイオス軍の部隊を破ったことがあるのは、その隊を指揮していたのが皇太子エストレイジアだったせい大きい。

「では、行かせましょう」

即答とまではいかないが、それに近い速さの切り返しだった。流石のジクルスも意表を突かれたが、すぐにその決断の合理性を悟った。

「承知致しました。レイン姫を視察に同行させ、然るべき対処をいたします」

レインが刺客であるなら、アラン王やエルフォード、マリアなど王族の傍からは離れた方が良い。ジクルスは最も殺される可能性が低く、万一殺されたとしても問題が少ないのだ。王宮の外であれば、ジクルスがレインを始末することもできる。

ロベリアにとて情はあるが、国王に次ぐ為政者として妥当な判断を下したのだ。

（レインが暗殺者であるなら、俺は何だ。戦争が終わろうと剣を振るい続ける俺は）

息苦しさに似た、重苦しい感覚がした。ジクルスには馴染み深い

感覚だ。王位継承権のあるなしにかかわらず、ジクルスに流れる血が、逃れることを許さない。

脳裏にレインの物憂げな横顔が浮かんだ。

* * *

「な逝きぞ。汝無き世に如何なる甲斐かあらむ」

「しばしの別れに侍り。願はくは良き人ぞ得て、長く世に在り賜へ。我、幾度の生を受けど、背子せこをぞ想はめ」

「何故だ、レイン。何故俺を庇った」

東の邑を治め、西国との同盟が成立し、いよいよ帝政が本格的になるうとする矢先の出来事だった。

“ミカリス・シア 広大なる山脈”へ狩りに出かけたラクシオを、数人の賊が襲った。無論、護衛は連れていた。オリ力をはじめとした精鋭だ。ラクシオ自身も剣を抜いた。

勝てない戦いではなかった。賊は、日頃は鍬くわや鋤すきを握り、身なりの良い人間を見かけたときだけ追剥となるような一団だったのだ。ところが乱戦の最中さなか、ラクシオを狙った矢を、レインがその身に受けた。彼女の白い衣は瞬く間に血に染まり、レインは地に伏した。

「……貴方が今まで私を守ってくれたのと、同じ理由よ」
掠れた声で返事をし、レインは弱く咳き込んだ。

彼女の見る間に青ざめていく頬に手を添え、ラクシオは激情を飲み込んだ。

賊は一人残さず切り捨ててしまっていた。

「レイン死ぬな。お前のいない世界に、何の値打ちがあるというのだ」

たった一本の矢だ。鏃やじりに石が使われるような粗末な矢に、ラクシオの最愛の妻の命が奪われるなど、耐え難い。

次第に冷たくなるその瘦身を温めようと、ラクシオはレインを強く抱きしめた。

浅い呼吸が、矢の当たり所の悪さを物語っている。

「ラクシオ私ね、戦う力を持たないことを、ずっと悔しく思ってたわ。それさえあれば、いつも貴方の隣にいられたのに。だから次は、貴方の背を守るような人生を歩みたい」

「次だなど……！ お前はいつだって俺を支えてくれたじゃないか、それで充分だ！」

しかし戦士たるラクシオは、何度も仲間の死を見送ってきたのだ。妻がもう長くないことなど、理性では分かっていた。

レインはそつと微笑んだ。医術にも通じる彼女は、己の死を悟ったのだ。

「少しの間のお別れです。どうか良い後妻を娶って、長生きをして。私は何度生まれ変わっても、貴方のことを愛しているからね」

ラクシオが皇帝でも英雄でもなく、レインが邑長の一人娘に過ぎなかった幼い日と、同じ微笑みだった。それからレインは目を閉じ、ラクシオの腕の中で息をするのをやめた。

慟哭を抑えられなかった。

ラクシオ帝、レインが骸を抱きて泣けり。その衣、御髪、深紅に染まれり。

神の愛し子の乙女、あはれ広大なる山脈の麓に斃れけり。

十四話 その手は血に染まり（後書き）

本文中の古文は、高校生の知識で書いたものですので、誤り等ございましたら教えていただけると幸いです。

十五話 故郷（前書き）

遅ればせながら、十五話です（汗）。

十五話 故郷

常々思っていたように、レインの荷物は少なかった。三人きりの侍女が手分けしただけで持ち切れている。侍女はそれぞれ自分の荷物があるにもかかわらず、だ。

「ほほう、堅実な姫君ですな」

顎鬚をなでながら唸るのは、サザール將軍だ。ロベリアの命令で、レインとジクルスの護衛に付くことになっている。その声は感心半分、疑問半分といったところだ。

数か月前まで最前線にいたジクルスにしてみれば、護衛されるのは妙な気分だ。レイン皇女自身にしても暗殺者を返り討ちにした来歴がある。王子と異国の姫を中心とした一団のくせに、戦えないのは侍女たちだけという結構な武道派揃いになっていた。

「まあ、身軽に越したことはないでしょう」

丁寧に答えるジクルスはサザールの隣りに立ち、馬車に積み込まれる荷物を見守っていた。ウォールディア王国内にはケイオス帝国に恨みを持つ者が多く、ケイオスに入ればウォールディア王子は仇だ。気の休まらない旅になるだろう。サザールも戦歴の軍人であるから、そのことは理解している。故の感心だ。

將軍はふと、表情を引き締めてジクルスに向き直った。ジクルスは長身だが、恰幅の良いサザールには威圧感を感じる。

「それよりも殿下、出立にあたり、一つ頼み申し上げたいことが」

“殿下”の呼称に反射し、ジクルスの佇まいが王子のそれに変わる。サザール將軍に比べると随分若いジクルスだが、潜った死線は勝る。それは血筋とも相まって威厳を醸していた。

ジクルスは「続ける」と指示する。サザールは頷き、跪いた。

「仮に交戦となった場合、殿下は剣をお取りになりませんよう」

ロベリアに裏から手を回されたのかサザールの考えなのかは不明だが、ジクルスはこう言われることを予想していた。

「貴公や貴公の部下を犠牲にしてもか」

「左様に御座います」

答えるサザールは膝を突いたまま、真摯だった。立場上これ以外の返事はできないが、本心から言っているのだと分かる。

王位継承権を破棄したとはいえ、ジクルスは第一王子だ。死ねば国の威信にかかわり、帰還した護衛は無事では済まされない。ジクルスが戦ってはいけないのも、道理なのだ。戦時中、英雄ジクルスが前線に立つことを求められたのと同様に。

王子の返答は決まっている。

「了解した」

そこへ、レインがやってきた。女物にしては動きやすそうな、質素なワンピース姿だ。

「サザール將軍ですね？ しばらくの間、よろしくお願ひします」

「これはご丁寧に。護衛など活躍する機会がないのに越したことはありませんが、誠心誠意お守りさせて頂きますぞ」

レインが暗殺者を返り討ちにした件は秘匿されているので、サザールは皇女が実は相当戦えることを知らない。淡く微笑むレインに好々爺のような（実際、孫がいる）笑みを返して冗談さえ言った。ジクルスも紳士的な微笑みを作った。

「では、参りましょう。まず目指す所は」

* * *

紅龍部隊は今日も、城下の数人を除いて兵舎の外れで訓練していた。

剣と左手を縛り付けていた布を解き、セルムは木陰に腰を下ろす。休憩時間なのだ。

すると、最近入隊した赤毛の少女が隣に座った。

「ねえセルム、シア副隊長の様子がおかしいと思わない？」

「ラピスもそう思うんだ。僕も気になってた」

歳が近いので、セルムとラピスはそこそこよく話す。自然、隊長がケイオス視察に出発して以来沈みがちな上官の話題になった。

シアは訓練中こそ鮮やかに剣を振うが、剣を手放すと表情が曇り、似合わないため息などをつきだす。隊の指揮を任されたくらいで重圧を感じる人ではないのだが、何故落ち込んでいるのだろうか。

「カック先輩は何か知ってますか？」

ラピスはそのまま近くに立って汗を拭いていたカックを見上げた。セルムにはよく分からないのだが、ラピスはシアとカックの間に何かあると思っているらしい。おそらく“女の勘”というセルムの一生理解できない次元の能力なのだろう。

カックはタオルを顔から離し、苦笑いをした。基本的にふざけているこの男にしては珍しい、含みのある表情だ。

「知っているが、俺からは話せない。シアも話したがらないだろうな」

てつきり「分からない」と返ってくるかと思っていたセルムは意外に思ったただけだったが、ラピスは諦めなかった。立ちあがって気の強そうな目つきになり、

「他に知っている人、いますか」

と、セルムがおいおいと思うような質問を繰り返した。しかしカックは苦笑いのままこの場にいない（いても訊けたもんじゃない）人物の名前を挙げた。

「隊長か、サザール將軍なら。……ほら、休憩終わりだ。昼飯までもう一頑張りするぞ」

言うなり、自分の剣を掴むと歩き出した。普段はジクルスかシア

に叱られるまで木陰に居座るのに。

「……ラピス、カック先輩も変だね」

「うん」

少年少女は首をかしげあった。

「ねえセルム気付いた？ さっきカック先輩、副隊長のこと名前で呼んだんだよ」

「言われてみれば。『姐さん』じゃなかったね」

「やっぱりあの二人、何かあるよ」

「……シア副隊長が心配なの？ 色恋を面白がってるの？」

「六対四くらいで前者」

「え」

素直すぎるラピスの答えに、絶句するセルムだった。

その日、夜間の警備担当はシアとラピスだったのだが、待ち合わせ場所に来たのは何故かカックだった。

「何であんたがいるのよ」

私服で物騒な雰囲気を漂わせるシアを、カックはまあまあと宥めた。

「暗くなつてから女二人が出歩いてたら変だろ。俺が代わるように頼んだんだよ」

「……そうね。私の手落ちだった」

それからまた、シアは無自覚にため息をついた。

警備のため、いつぞと同じように肩を並べて歩く。しばらくは互いに無言だった。

人気のない裏通りにさしかかったが、放火犯の気配はない。カックは前を見たまま、そっとシアに話しかけた。

「ネーデに 俺達の故郷に、行きたかったな」
シアは立ち止まってカツクの顔を見上げた。

ケイオス視察に出発する前、シアとカツクはジクルスの執務室で行程を説明された。

『少し遠回りになるが、ネーデ村に立ち寄りうと思っっている。サザール將軍は納得してくださった』

副隊長たるシアだけでなくカツクまで呼ばれたのは、二人がネーデ村の出身だからだ。

『……私たちが同行することはできませんか』

珍しく無理を言ったシアの気持ちがあつたのだろう。ジクルスは故意に無表情になって首を横に振った。カツクはシアに同調しないよう自分を律するのに必死だつた。あと数分長くそこにいたら、膝でもついて頼み込んでいたかもしれない。

ネーデに。十年前に滅んだ故郷に、行かせて欲しいと。

「情けないよね、ラピスやセルムにまで心配かけて」

「仕方ないさ」

「あんただって帰りたいのに」

「まあな」

愚痴をこぼすうちに、シアはこの同郷が気を遣っているという事実に気付いた。意外と細やかな気遣いのできる男なのだ。隊の人間はほとんどが知らないが、シアは知っている。

「……ありがとう」

「どういたしまして」

このそつけない励ましに、シアは何度も助けられてきたのだから。「ネーデに行きたかった」

「俺もだ」

「でも一番辛いのは多分、行ける隊長だよな」

「だろうな」

それからまた会話は途絶え、二人は歩き出した。それぞれが十年前、故郷の最期に思いを馳せながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2971o/>

世界中の想いより強く

2011年12月4日02時45分発行